

浄土

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和二十四年四月二十八日 運輸省特別換承認雜誌第三五二号
昭和三十五年二月二十五日印刷 昭和三十五年三月一日発行

第二十六卷 第三号

三月号

浄土

既刊

浄土トラクト

大正大学教授 佐藤賢順著

信仰へのみちびき

B六版・十六頁
定価十五円・十八円

目次

1. 大慈悲の仏教
2. 本願の不思議にて
3. 人生は信ずる心から
すべてを包む愛

大正大学教授 竹中信常著

仏教入門

B六版・三十一頁
定価二十円・十八円

目次

1. 馬に水を飲ませるもの
 2. なやみとまよいのもと
 3. 信ずるところ
 4. 美わしき世界の建設
- 側々と人の心を打つ失明の体験 森 赫子
文学の世界からみた無常の話 武田 泰淳
宗教の信仰を遺文にみる 佐藤 賢順

甦えるいのち

A五版・二十七頁
定価三十円・十八円

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

振替 東京八二二八七番

二十部以上 五分引
五十部以上 一割引
百部以上 一・五割引
二百部以上 二割引

浄土 三月号 目次

表紙・扉絵

結城天童

さし絵・カット

加藤金一

美しき彼岸……………宮林昭彦……………(6)

小鳥の説法……………佐藤賢順……………(2)

単直仰信の行者……………北出立仙……………(28)

身辺雑記③

感情……………森 赫子……………(10)

撫子の美しさ……………鈴木成元……………(20)

高僧伝養鶴徹底……………大橋俊雄……………(8)

法然上人の感化……………村上博了……………(24)

新篇百喻経②……………伊東挙位……………(39)

信仰相談…………………………(26)

石川啄木(2)……………須藤隆仙……………(12)

扉の御法語……………(10) かむことは長生きのもと……………(19)

童心仏心……………(18) 会員だより……………(40)

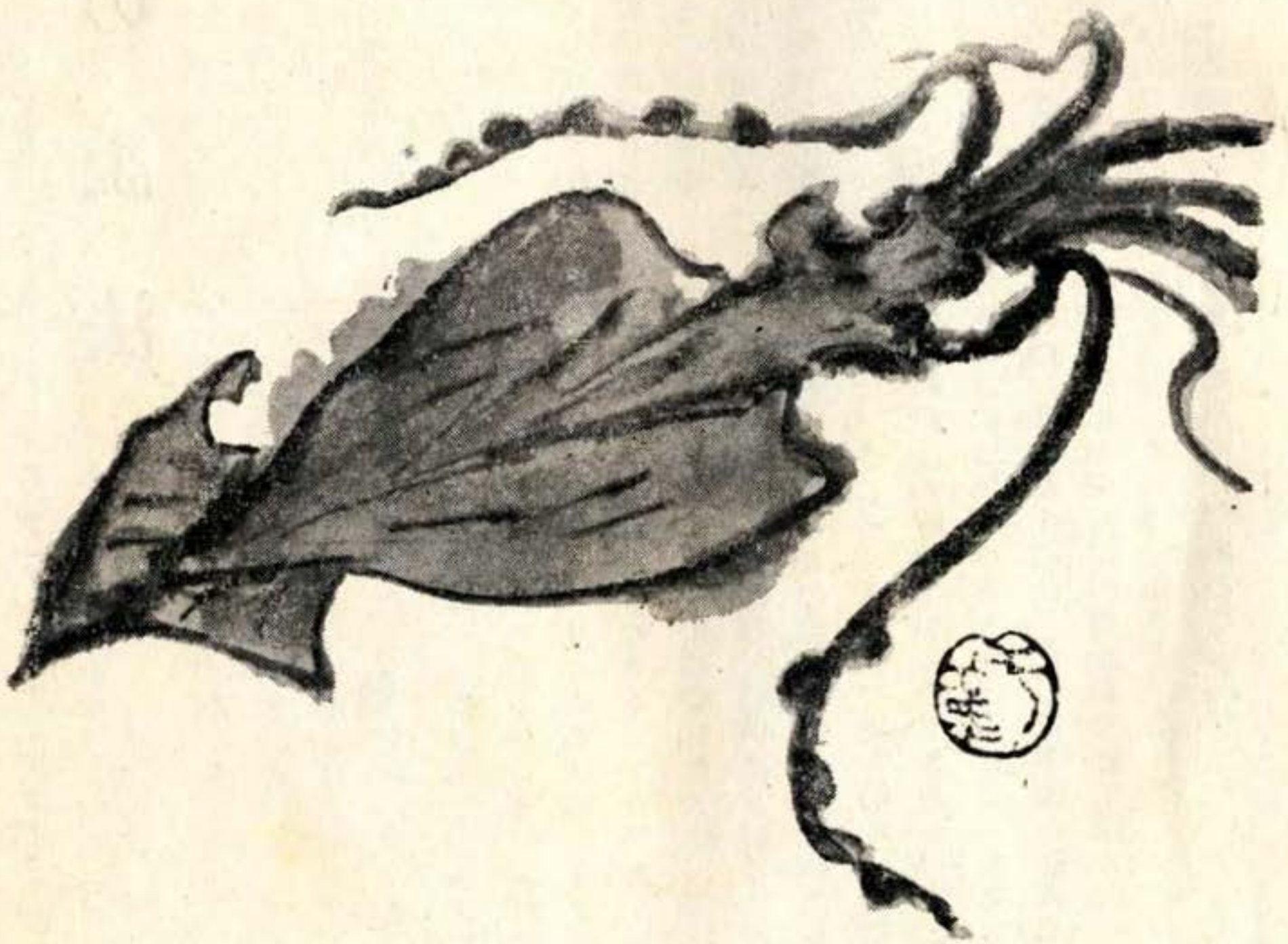
釈尊の生涯(八)……………佐藤密雄……………(32)

浄土

三月號

時をいへば、末法万年の後、人壽
十歳につづまり、罪をいへば、十惡
五逆の罪人なり。老少男女のともが
ら、一念十念のたぐひに至るまで、
皆これ攝取不捨のちかひに、こもれ
るなり、この故に諸宗にこえ、諸行
にすぐれたりとは申なり。

法然上人御法語



小鳥の説法



佐藤賢順

戦争もたけなわになった頃、わたくしは病氣静養のため、しばらく鎌倉の極楽寺の奥の西ガ谷という所に住んでいたことがあった。そこで三度冬を越した。もっとも常住したわけではなく、いよいよ敗戦の色も濃くなって、東京の寺がいつ空襲で焼かれるかわからないという状況になってからは、家族をそこへ疎開させてわたくしは東京に住むことが多かった。

鎌倉には谷（やと）と呼ばれるところが多く、丘と丘との間の狭い谷あい、恐らく昔は入江であったであろう。わたくしの仮り住まいは、この谷の一軒家で、うしろは雑木山で前は陸稲の畑を

隔てて松山であった。二月の半ばになるとやぶうぐいすの囀りが始まってくる。チャッチャッチャッという地鳴きから、本調子になって、二段、三段と音を張るようになり、ついに谷渡りになる。わたくしはその色々の調子を楽しく味いながら聞いていた。うしろの雑木山で鳴き始めて、畑を越して前の松山へ渡っていくのであるが、時にはその声が耳についてうるさくなることもあるほどであった。今年も今頃は、あの声が聞かれるであろうか。昨年の四月に、末女をつれて鎌倉山へ花見に行った帰りに、（この鎌倉山の花見というのは、恐らく関東第一であろうと思う、というのは、人

に知られていないせいか、酔っぱらいは勿論のこと、ろくに花見客というものが来ていない、ほんとうの桜の美しさを味える所だ。旧居のあたりを散歩したが、近頃は、山は切り崩され、木は切り倒され、安普請の家は立ち竝んで、サンタンたる有様であつたから、うぐいすなどはもう寄りつきまい。

鎌倉に住むようになった前の年は、小田原の早川口の海辺に冬から夏までを過した。実はここで小鳥の世界をのぞく目を開かれる機会に出会つたのである。生れてからずっと東京に住んでいたわたくしは、小鳥といえは籠で飼われているうぐいすかめじろ、位しか知らないし、野菜や果物といえは八百屋の店頭に竝べられた以後の姿しか知らなかつた。それが散歩の途中で、木々の梢や生け垣の上で囀っている野鳥を折々見るようになって、それが何という鳥で、どういう生態の鳥かを確かめようという、新しい興味が湧いてきた。早川の橋の上からセグロセキレイが流れの間の岩の上をヒョイヒョイと飛びながら、巧みに虫を把える有様を長い間見ていたこともある。その頃はまだ頭が

黒くて首の廻りが白い鳥が四十雀であることを知らず、ホホシロだと思つていた。首の廻りが白かったのでそんな気がしたのであろう。

丁度、その頃、近くに居た小鳥屋のちいさんと懇意になつた。そのちいさんは箱根あたりの奥山へ行つて、オオルリやコマドリの巢を見つけて、雛を取つてきて、それを育てて、いわゆるさし上げをやつて、小鳥屋へおろすのが商売であつた。

勿論、オオルリやコマドリばかりでなく、野鳥という野鳥は何でもといたい位、いろいろの種類を飼つていた。このちいさんの坐っている長火鉢のわきには、鳥籠が幾つも置いてあつて、把えきたばかりの成鳥を餌づかせるために、暴れないように籠の上に風呂敷をかぶせてうす暗くして、話をしてゐる間に、十五分に一度ずつ位、餌じゃくにすり餌をのせて、鳥を片手で籠からつかみ出して、くちばしを巧みに開けて、餌をつつ込んでやるのである。その物慣れた調子を、感心して見入つたものである。

ちいさんが小鳥の籠の中をのぞき込んだときの表情は、実に楽しそうであつた。雛が一日一日と

育っていくのは、自分の孫が育つのと変りはないのであろう。ちいさんは人間の世界と小鳥の世界を全く一つにしているようであった。少くともちいさんの人生は小鳥の世界へ滲透していつている。メス鳥とオス鳥とを一つ籠に入れておいてはオスは鳴かない。

「人間でいってみればよう。なにかかあがそばにいるのに道楽することはないじゃないか。鳥だってそうだよ。鳴くのは女が欲しからで、一しよに入れておいて鳴くやつがあるもんか。もっとも人間にはかかあがあっても道楽するやつもあるがね。」

といった調子である。接吻、恋愛、憎悪、愛撫、虚実、すべてこのちいさんの口にかかる、人生百般の問題は小鳥の生態から解釈される。このちいさんの影響で、わたくしは小鳥を飼いはじめた。初めはメジロとウグイスを飼った。それまでメジロとウグイスの区別はつかなかったが、飼うようになってから、うぐいす餅のような色をした方がメジロで、薄ぎたなく黒ずんだ方がウグイスであることがわかった。メジロが地鳴きから初

めて、たかねを張った朝は、それを聞きながら寝床の中で、わくわくした。それから病は次第にコウモウに入って、ついにオオルリを飼い、コマドリを飼うようになった。東京へ引き上げてくるときにも、オオルリとコマドリの籠は、大事に持って帰ったが、何分にも、戦争がはげしくなつて物はいよいよ窮乏になり、すり餌の材料を求めることは容易でなくなり、なかなか苦労したものである。

戦争後はメジロなどを飼ったこともあるが、あるとき良寛の歌を読んでからは、小鳥を飼うことはやめてしまった。その良寛の歌というのを、今どうしても思い出せない、良寛逸話集や詩歌集を捜してみたのだが、急いでいるので見当らない。そのうちに捜しておくが、その歌は、ある人がうぐいすを飼って、その鳴き声を自慢して良寛にも聞いてもらおうとして招いたところ、良寛は、この鳥はこんな狭い籠に入れられて、さぞ窮乏なことであろう、大空へ放してやったら、どんなにか喜ぶであろう、という意味であった。なるほどその通りであることは、わかりきっているのだが、

改めてそういわれてみれば、飼うのに気がひけて、とうとう鳥籠で飼うのはやめてしまった。

実は鳴鳥を飼うというのは、なかなか容易ならざること、鳴く期間は一年のうちで四分の一か長くて三分の一であって、あとはチュッチュッというだけなのを毎日、すり餌で養ってやらなければならぬ。ところがそのうちに、小鳥を飼わなくても、存分に鳴き声が楽しめるといふ道が開けてきた。それはラジオの「朝の小鳥」である。

これも溯ると古いことで、二十年も前に比叡山の元黒谷青竜寺から現地放送したのが最初のものである。元黒谷は法然上人が十八歳から二十四歳まで修学した所で、比叡山でも八瀬大原へ近い全く人里離れた幽邃境である。その頃、青竜寺の住職から、何日何時に小鳥の声を放送するから是非聞いてくれ、という案内状がきたのを憶えている。昨年比叡山へ行ったときは、山も観光道路の開発で小鳥の楽園もだいぶ荒されて、小鳥は少なくなったが、元黒谷のあたりはやはり一番多いように思う、と廻峰行の葉上阿闍梨から小鳥情報を聞いた。

さて朝の小鳥の放送だが、浅間山麓や戸隠山からの現地録音で、ほんの五分間位送ってくるのだ

が、この朝の五分間は実に楽しく、大自然に溶け込む思いであった。しかしどうかすると朝の作務に忙しくて、スイッチを入れるのを忘れてしまうことが往々あった。ところがまた新しい手がでてきた。丁度、その頃、他に必要があつてテーブコーダーを買い入れたので、「朝の小鳥」をラジオセットからテーブに録音するという新手である。こうして小鳥の声の罐詰を作ることになった。罐詰にしておけば、いつでも聞きたいときに、出して聞けるというわけである。

野鳥の声を聞いたからといって、別のなんのこともない。ただ何となく涯しなく深い世界からの呼び声を聞いているように思えるのである。時々わたくしは野鳥の声を聞きながら、阿弥陀経の「この鳥はこれ罪報の所生なりと思うことなかれ。阿弥陀仏の法音をして宣流せしめんと欲して変化して為したまう所なり。」という一句を思い出すこともある。十三世紀の画家ジョットーの描いたアッシジのサンフランチェスコが小鳥に説法している壁画は有名である東洋的にいえば、人が小鳥に説法するのでなく、小鳥が人に説法するのである。

美しき彼岸



宮 林 昭 彦

彼岸まえ寒さも一夜二夜かな

季節はいつわりなくめぐつて来る。彼岸を迎えるころになると、きびしい冬の寒さは遠のいて、いずこからともなく、あたたかな春が、そつと、やって来る。

奥信濃では、この頃は、暖冬異変でようすもだいぶかわったが、いぜんは、冬三月のあいだは雪におおわれていた。そのため、農家が田畠に出るのは、三月の声をきいてからである。この季節になると、あたたかい日、田の畔や、土手あたりには、おんなや子供たち

が、もちぐさを摘むすがたがみられた。

彼岸が近くなると、近所の年寄りに手を引かれて、よく、草餅にいれるもちぐさを摘みにいったものである。一週間もまえから、いろいろ準備して、彼岸の中日には、かならず、先祖の仏壇にお餅を供え、香を焚き、家内中のものが集って、お経をきいた。三月半ばとはいえ、いまだ寒い信州のこと、体をふるわせながら、合掌してすわっていた姿がおもい出される。幼き日のことがなつかしくいまでも甦ってくる。

彼岸、これは、わが国に伝えられ、おこな

われている、数おおくの行事のなか、わたくしたちの民族のころに、うるわしさと、やすらぎをあたえる、美しい行事のひとつであらう。

およそ、仏教は、より正しい生き方をおしえ、より幸いなおき生活にみちびくおしえである。その日一日を精いつばい、いなむしろ、一刹那一刹那、むだのないよう、悔いなきように心がける、というのが仏の教えであらう。

しかし、わたくしたち人間の生活には、四六時中、やすみなき緊張は困難である。ゆるみや、たるみもおこってくる。そこで、適当に生活に変化をもたせて暮らすことがのぞまれる。

一年についても同じこと、ことに、わが国のように、四季とりどりに花や月のおもむきのかわるところでは、時のうつりかわりにつれて、気持のあり方も、いろいろにかわる。わが国に、むかしから年中行事のおおいは、このような風土の影響もうけているので

あろう。

彼岸の行事を、営むようになったのは、平安朝以後のことであり、鎌倉時代にはますます盛んにおこなわれるようになった。

「彼岸」という言葉は、「此岸」に対する言葉である。不安と悩みにおののく現実を「此岸」とし、平和と安寧のみちたりた理想世界を「彼岸」とする。現実の世界をこえた理想世界のことである。仏教では、悩みおおい人間苦にうちかって、理想を実現することをおしえる。おのおのが、自分の全力をつくして、正しい生活をし、自分のほんとうの幸福を求めるとともに、すべての生きとし生けるものが、みな幸福になるように努力することを目やすとしている。

一年のうちでも、春分と秋分の日、太陽が真東から出て、真西に沈むというところから、彼岸をかんがえるに、もっとも適した日であると信ぜられるようになった。そして、この日を中日とし、前後の三日、すなわち七日のあいだを彼岸の節とし、仏道精進のときとした。

鎌倉時代になっても、宮廷で彼岸懺法せんぽうがお

こなわれたり、殺生が禁止されたりしている。この時代には、すくなくともこの日には、生活をつつしみ、悪いことは避けるべきものと、一般にもかんがえられていたようである。

江戸時代には、「御鏡磨きみかがみか」といって、彼岸の中日に鏡をみがくと光を増すといわれ、女性たちは、一生けんめいみがいたものである。これなども、必を磨くことから転じて、鏡のことがいわれるようになったものであるう。

けう彼岸菩提ぼだいのたねを蒔く日かな

彼岸のころは、野菜のたねを蒔く時期でもあるが、それにも増して大事なことは、菩提ぼだい（ぼだい）の種をまくことであろう。

菩提とは、さとりのことである。迷いをすてて、正しい生活に入るのが、さとりである。彼岸は、ちようど、そういう決心をするのに、もっともよい季節といえる。

彼岸に、お寺詣りをする習慣は、江戸時代よりさかんになった。江戸では、六阿弥陀詣で、大阪では、四天王寺がにぎわった。ま

た、どこの寺でも彼岸会がいとなまれ、法事、説教がおこなわれた。一般の家庭では、団子や牡丹餅などをつくって、仏や先祖に供養し、隣り近所や、知人などにおくる習慣ができたようである。

これらの行事をみても、平常わすれがちの大切なことに、気をくぼるのにもっとも適した日であることがわかるであろう。

時はながれ、歳月はうつろうとも、わたしたちの人情はかわらない。彼岸、その日には、しずかに念仏をたむけて、先祖を偲び、亡きみたまを供養するとともに、めいめいが、自分自身の生活をふりかえって、しっかりと、反省することが必要である。

そしてひろく社会の困っている人たちに、すこしでも、あたたかき愛の手をさしのべるように心がけたいものである。そうすることによって、ふるくから、先祖より伝えられてきた、美しい彼岸の行事が、ほんとうに現代に生かされることになるのである。

× × × ×

× × × ×



近代高僧伝

養鷗徹定

万延の頃、浄土の三哲と言われたのは福田行誠に神原円海、それに徹定を加えた三人のことであり、行誠は戒律僧として其の名一世に高く、円海は台学に通じた学匠であったが、後に還俗して精二居士と言ひ、護法をもつて聞えた人であった。徹定と行誠は明治時代の浄土宗史の上に輝かしい足跡を残したが、両僧はあまりにも対照的な名僧であった。徹定の晩年は気の毒であったとはいえ、彼の壮年から中老にかけてその生活の実に花やかで、時に酔歩蹢躅、女人に手を引かれたという極めて人間的な面があり、請われれば

喜んで詩を吟じたが、行誠は一生を通じ、極めてあくぬけした剛毅者であったと共に、絵を能くし、すぐれた歌を残した戒律僧でもあった。

徹定は文化十一年三月、久留米で生まれたが、其の父は万五郎政喜と言ひ、有馬藩の武士であった。文政六年三月、六歳の時檀那寺西岸寺の光誉禅竜に就いて剃髪し、名を徹定と改めたというものの、出家の動機について僧伝には「幼にして西に向ひ、合掌するの習癖あり、土をもって仏をつくる。因縁や催しけむ。六歳にして禅竜和尚の座に投じ、花

髪を剃りて徹定と改む」といつているが、彼の入寺は決して自発的なものではなく、禅竜に強請されての出家であった。従つて両親の信仰から出家したのでもなかった。禅竜にとつて政喜の子供が何となく、好きであつたからというにしかすぎなかったらしい。それだけに弟子徹定の寵愛振りも一通りではなかった。腕白のあまり汚した着物も洗つてやれば、夜尿の衣類も洗濯するという程の、親身も及ばぬ世話をやき、その態度は溺愛というに近いものであつたという。

和尚の慈愛にいだかれ、平安な日々を送つていた徹定も十四歳の春を迎えるや京都にのぼり、朝に仏教教学の修学に指をそめ、夕には儒者の門をたたいて経史の講を聞き、十九歳の秋には更に宗学の研鑽を志して、江戸増上寺の順応寮に入った。ここに居ること六年、一時京都に去つて儒仏の二道を究めたが、天保十三年二十九歳の時、増上寺の招きを受け、新谷学寮の寮主となつた。二十九歳という若さを以て学寮主に就いたということ、異例の人事で、彼が当時群を抜いていた人材であつたことを思わせるに充分である

う。

しかし彼の在寮は僅か五年にしかすぎず、顕職をぬぎすてて故郷に帰っていった。故国を後にして既に二十年の歳月を閲して居り、望んでも容易につくことの出来ない学寮主の名誉ある地位を得て、錦を飾って久留米の地を踏んだのである。

嘉永五年、三度び上洛して鹿ヶ谷法然院に錫を留め、忍激対校の大藏經に目を通したが、時偶々京洛の古寺を訪ね、大和の名刹をめぐった時、目にしたのは余りにも沢山の古写經が無雑作に、しかも誰の関心をもさそうとなしに放置されているということであった。彼は此等すぐれた逸品を手の触るるに従って買い求めた。其の資財は彼を愛撫して措まなかった師禪竜の遺産であつた。文久元年春には、岩槻浄国寺に住したが、その在職中明治維新を迎え、教部省が置かれた時には、官内省の伶人について雅楽を習い、束帶を着けて大教院の伶人となり、時に祝辞を奏することもあるという。明治五年六月浅草誓願寺に転じたが、九月には伝通院、同七年四月には知恩院に住し、翌年三月大教正を拝命す

る等トントン拍子の出世で、知恩院に上山したとき彼は六十二歳であつた。これを日野靈瑞の七十一、福田行誠の八十二に比すれば、如何に早く世に出て、世人の認むる所となつて知恩院に上山されたかを知ることができよう。

徹定は松翁・古溪・杞憂道人・古経堂主などと号したこともあり、著書も多かったが、中に「古経題跋」は其の最たるものであつた。この書物をつくるために払った材料蒐集の苦心と資財とは到底尋常なものではなく、最初この面に手を染めた当時は、彼の師禪竜は惜しげもなく私財をあたえていたが、その私財たるや徹定の欲求を満たすにはあまりに豊かではなかつた。終に彼は欲望を満足させるために金融業者の門をたたいたが、その最も大なるものは久留米の某銀行であつたという。金額にして、当時の金にして凡そ四十万円もの大金であつた。天平古写經等の逸品の多くが、今に知恩院に蔵しているのはこれが故である。銀行にして見れば、徹定が知恩院主なるが故に貸したというものの、当時の知恩院は幕府の朱印を離れて、日常の生活

にも事欠く状態で、到底返済する能力とてなかつた。銀行は晏如としていることが出来ず、知恩院門主としての徹定を相手どり告訴の上、知恩院堂宇の競売を企て、一宗侶僧の狼狽言語に絶していた時、これを未然に防ぐべく推され、負債の責任的立場に立たされたのは豊橋悟真寺の住職山田弁承であつた。

二十年四月には、知恩院門主及び浄土宗管長の職を福田行誠にゆづつて、山内福寿院に隠棲し、専ら称名念仏裡に日を送っていたが、同二十四年二月尾張に巡化の途次病を得て、三月十五日名古屋の阿弥陀堂で、七十八歳を一期に示寂せられた。法名を

随蓮社順譽上人金剛宝阿徹定大和尚

という。花やかなりし、七十四歳にして管長の職を退くまでの生活にくらべ、古写經保存の精神に依るとは言え負債のために失墜し、示寂の際には従僧一兩名あるのみ、知る者をして思わず涙せしめたときえいわれている。

(大橋俊雄)

身

辺

雑

記

(三)

感情

母の所へ見舞の為、久し振りに姉と二人肩を並べて車に乗りながら、私は子供の頃から娘時代迄、いつもこうして姉と二人肩を並べて学校に通ったり、遊んだり、喧嘩をしていた事を思い浮べていた。幼い時、両親と離れて叔母の家に育った私達なので、私にとって姉は、母のようであり姉のようでもあり、喧嘩友達でもあった。やがて車が着いて降りると、姉は一人でさっさ

森 赫 子



と行ってしまう様子に、私は驚いて声をかけると、「ごめんなさい、見えない事忘れてしまつて、コッチ、コッチ」あわてて引返して来た姉は私の手を取った。近頃炊事もするようになった私は、手の平の堅くなったのを気にしていたのだったが、姉の手はそれよりも遙かに堅く、結婚して二十五年、家事に育児に家の中を走り廻って来た姉の生活が、その手を通してし

扉の御法語

勉学の結果、ある一つの境地になったから信仰するとか、金が儲かるとか病気が治るから信仰するとかいうものでなく、現代のわれわれが救われる道は、お念仏を申すより外にないからお念仏を申すのであるというのが、この御法語であります。

遠江国蓮華寺の禅勝房は、初め天台宗を習学されていましたが、後に熊谷入道の許で、お念仏につき教えられ、「くはしき事は、わが師法然上人にたづね申さるべし」というので、上人の許に参じました。彼は百余日上人の禅室にあって直接上人から教えられました。その時に彼が上人に質ねた事のうちに、「自力他力ということがありますが、これはいかように心得たならばよろしいでしょうか」という質問があります。

これに対して上人は、他力の願について詳しく説明されました。智慧のあるものもないものも、罪人も罪のない人も、善人も悪人も、持戒も破戒も、男子も女子も、お念仏を唱えるならば必ず往生することを説かれました。「智者は智者にて申てむまれ、愚者は愚者にて申てむまれ、云々」というお詞もこの中にあります。

そして最後に、この御法語の句が続きます

み通って来る思いであった。

その姉と、その後私は、やはり母の住居の事から電話で口争いをしてしまった。親切で人の良い代り感情をしまっておけずぐ口に出してしまふ姉は、その日は非常に感情的になって自分の立場を云い立てていた。それを聞きながら、私も次第に感情的になると、一つ一つ言葉を返していた。

「そんなに云うのならほっといて丁度」

「そう、じゃあ勝手になさい、もう付合
ない」

「いいわ、さよなら」

私達はまるで子供の喧嘩のように電話を切ると、しかし頭に上った血はなかなか収らず、その夜は眠むれない程気にかかっていた。ところが翌日、姉は忙しい中を早速私の所へ飛んで来ると、「まだ恐ってる？」と顔を出した。その声を聞くと私は、恐る事など何もなかったような妙な気持になって恐りはすっかり静まって、「ううん、別に」と答えていた。

しかし姉が帰った後で、私は再びこんな愚かしい喧嘩をしたくないと考えた。何を

しても云っても許されてしまう親しさと甘えが、ほっておけば今後もおこな事を繰返してしまうだろう。誠に感情の処理も出来ない知性のなさをそのまま出しているようで、恥しい思いである。

私はいつかラジオで聞いた言葉を思い出していた。「やたらに自分の感情をそのままふり歩くのは、自分の排泄物をふりまいて歩いているのに等しい、ふり歩く方はさっぱりしていいかもしれないが、まかれる方は誠に迷惑である。」と、又、いつか上演された「お茶と同情」という外国映画を思い出した。一杯のコーヒーを飲みながら話し合うだけの同情、それ以上踏み込んでも込まれてもいけない。そんなけじめのある愛情を私達は親しい人達の間にこそ必要のようである。今度こそ、姉がもし感情的になった時にも、静かにうなづいて聞ける位の距離とゆとりを持ちたいと思う。

私はお茶を沸しながら、感情の火と知性の水と、こうしてガスや水道の栓をひねるように自由に調節が出来たら、どんなにいいだろうと考えていた。

す。釈尊滅後の五百年はまだ正しい法が行われ、その後の千年は仏像を中心に正しい法が行われますが、その時代が過ぎてからの一万年は末法の世の中となります。法が衰えるにつれて人の寿命も短くなり、人の大きさも小さくなってゆきます。十悪五逆という極悪の人がうようよすることになります。

これは釈尊がなくなられて後の年代の推移です。末法だから罪を犯してよいといえませんが、罪人の多いことは時代環境でありますから、罪人独りを憎んで自分は清しということができません。いかに末法でも悪から遠ざかり、善に近づくように無断の努力をしなければなりません。しかし仏の目からみれば、われわれの努力がいかに小さく、われわれの智慧がいかに薄いかを知らねばなりません。

われ賢しと思う人があったとすれば、その人はその時から賢者でなくなっています。この意味で上人は自らを愚鈍といわれたのですが、油断すまいと思うそばから忘念の生ずることもわれわれの実態であります。

毎日五万遍、六万遍の念仏の人も、一念十念の人も、あみださまはそんな区別は致しません。この故に念仏は諸宗にこえ、諸行にすぐれているというわけであります。

石 川 啄 木 ②

——法 然 へ 還 る 道——



須 藤 隆 仙

三、宗教に対する啄木の思想 (一)

さて既述の如く、その生いたちは仏寺と深いからみ合いの中にあった啄木にあって、宗教というもの、あるいは仏教というものに対しての、彼の思想ともいうべきものは一体如何だったであろうか。

これまで余り考えられておらなかったように思われるこの問題に就いて、私は多くの資料をここに提出して、これを考えてみたいと思うのである。

私は詩歌文学などを全く解せぬ野人であるが、彼の作と伝える『夏の朝』なる詩を非常に秀れたもののように思い、私なりに心酔してしまうのである。

次の如くである。

しづけき朝に音立てて

白き蓮の花咲きぬ

胸に悟りをひらくごと

ゆかしき香袖にみつ。

あしたの星の水に落ち
花となりてや匂ふらん

木魚の音のすみ渡る
仏の庭の池にして。

桜も散りて藤散りて
若葉の山のかげひたす
池の汀の石に踞し
白き蓮に対すかな。

そこに三寸のあみだ仏
仏の経や誦すらんか
小さき花の姫君の
薔しよのま中にゐますらむ。

あかつきふかき大空を
ひそかに月の降り来くだりて
桂の匂ったへけむ
姿を窓に見ざりしか。

襟にすすしきあき風の
巻葉浮葉を動かして
色めきわたる池のおも
さをさす舟のなからずや。

心ひらきて気ものびて
きよしとのみを思ひつつ
ま近き花を頬にあてゝ
おさるゝきよき匂かな。

蝶々垣を飛びめぐり

蜻蛉水に迷ひ去る

悟りをひらく大聖の

白き心は仰ぎ得じ

(北上河畔の啄木歌碑 岩手県洪民町)



やはらかに柳あをめる北上の

岸辺目に見ゆ 泣けとこくに

まぼろしの如ゆめの如
蓮の匂にうたれしよ
心ひらきし朝なれば
今日罪なしと日記にかゝばや。

これは明治三十四年八月一日「あけぼの」誌の三号に「白蘋」の名で載せられたものである。啄木の号は同三十六年(十八歳)以来

「啄木」と公表せ

られたそうで、そ

れ以前に「翠江」

とか「麦羊」とか

いていた頃もあ

るらしいが、この

「白蘋」が一番多

く使われたよう

である。これは宝徳

寺の池に咲いた水

草の白い花を愛で

て付けた、といわ

れ、宮崎郁雨氏は

「この名は余程気

に入つて居たようで、『明星』その他の紙上でもそれを使い、啄木を名乗る直前の三六年十月まで用いて居る」といつている(『海峡』58「啄木雑記帳」)そして吉田孤羊氏は、詩風、テーマからいつても啄木作品に相違ない、といっているから確実であろう。

白蓮によせて静かな宗教的雰囲気が出ており、実に美しく私は魂を魅かれるのである。三十四年といえは僅かに彼十六歳の頃である。この頃の彼に相当強い宗教的要素のあったことは事実のようである。

もっともこのことは四十二年十一月『食ふべき詩』を發表、その中で「以前、私も詩を作っていた事がある。十七八の頃から二三年の間である(中略)其頃の詩といふものは、誰も知るやうに、空想と幼稚な音楽と、それから微弱な宗教的要素(乃至はそれに類した要素)の外に、因襲的な感情ある許りであった」と記していることから知られ、当時の彼は、神とか仏とかの文字を用いた詩歌を相当残しているのである。

若き我れにふるべき鞭のつよき神触れゆく

を笛によみすや (35・10・30)

神を仰ぎ道なる花にはぐれきよ何地向きて

ぞ我歩むべき (35・10・30)

霜寒の筆の趣き市にたへず、ねがはく神の

詩の花たびね (35・11・1)

小さき神の幸のゐにしよ、熱かき曙雲のよ

ろこびの影 (35・11・5)

涯もなう流れて水はかへり来ず、神に終な

る裁判否む (35・11・5)

暗無限今か終りの、一呼吸の胸を覆ふぞと神

にすがりし (〃)

小さき神のこの世に生ひし香ぞ高う光あふ

る、曙よ今 (〃)

(以上日記より)

そしてこの頃は彼の周囲にも宗教を口にす

る人達が多かつたらしく、日記には盛岡の猪

川箕人から来た手紙に宗教が論じてあったと

か (35・11・13)、友人と宗教談を交した (35

11・15) とかいうことが散見される。

又三十五年十一月九日の日記には「淫姦の

罪の大なるはその人の心霊を無視したれば

也。されどあらゆる人の心霊を没却せんとつ

とむる社会の罪の更に大なるをば世の人はひ

たすら看取する勿らんと、罪惡とは自ら造る者に非ずして社会が作らしむる者也」などと精神主義的なことを記している。

思うにこの十七歳の頃は、あるいは西洋的神、キリスト教的神に何らかの関心を抱いていた頃かとも察せられる。宗教に対する考えという程のものを見出すには、年齢的にいっても稀薄のようである。ただし先の「夏の朝」などは宗教特に仏教的色彩を強くするもので、流石寺院育ちだと感心せられるのである。

四、宗教に対する啄木の思想 (二)

これが十八歳 (三十六年) の頃になると相当明確になってくるのである。

「自己と云ふ事を深く深く考へると、遂に

は、勇躍して靈性の要求に応じ大なる意志は

単に自己拡張のみではなくして更に自他を融

合し、外界を一心に摂容する者であることを

自覚してくる。この自覚が雷光の如く人心に

インスパイアした時、信仰と希望の礎は初め

て確然たる地盤をうるのである」 (36・9、

28 野村長一への手紙)

ここに初めて宗教に対する明白なる関心が顔を出してくるのである。そして面白いことに、この頃から啄木は絶対なる宗教信奉者となるのである。

もっとも宗教といっても高山樗牛や姉崎正治 (嘲風) そういった明治の精神主義者の思想に強く影響されたものであって、既存の宗教 (仏教の各宗やキリスト教の如き) に傾倒したものではない。

この頃の彼に相当強い影響を与えたのも事実右の二人である。彼は姉崎の「時代思潮」にも詩をのせているが、既にこの頃樗牛を知っていたらしく、樗牛のことで明治三十七年一月十三日初めて姉崎に手紙を出したのであった。樗牛は三十五年に死んでいるから啄木は勿論樗牛の文筆に傾倒していたのであるが、同手紙には「先生の故樗牛氏に与へられたる前後二回の開書、太陽誌上にて拝見致し候、稚き迷ひに胸悶えたる小生には、云ひ知らず尊き光の影と仰がれ候ひき」と記している。更に又「客臘樗牛先生の忌日には、こゝの小庵にてさかさやなる追想会となみ申し候」とあるから相当なものであったらしい。

姉崎は同年二月一日、日本基督教青年会の

招待で盛岡に来、「信仰の人高山樗牛」「仏

陀と基督」の二つの講演を行ったのである。

啄木はこの時初めて姉崎に会い「種々の談話の如きは胸深く刻まれて忘るべくもあらねばここに記さず」と同日の日記に記している。

更に同日の様子を友人金田一京助氏に「ハイネが初めてゲーテに逢うた時は、不断敬慕して居た大詩人の案外冷淡なのに失望したさうですが、私には失望所ではなく、非常に楽しくありました。これも死んだ樗牛博士の御引合せでありましたらう」と知らせているのである。(37、3、12同氏宛書簡)

啄木が姉崎を尊敬したのは樗牛を姉崎が讚美していたからであり、したがって樗牛に対する彼の信仰は一時絶対的のものだったようである。

「樗牛は我らが思想上の恩師であるし」とか「あゝ自分と嘲風氏との交情も、或は逝かれた樗牛先生の霊が結んで呉れたのではあるまいか」ともいっているのである(37、3、10小沢恒一氏宛書簡)。

それで考えられるのは、啄木の日蓮聖人に

対する態度である。

周知の通り樗牛は、日本主義からニイチエ主義、そして美的生活論、日蓮主義、と思想の遍歴を見せ、最後日蓮主義に花を咲かせた人であり、「日蓮上人とは如何なる人ぞ」(文芸時評)など日蓮に関する著書も多くある人であるが、この樗牛を尊敬していたのであるから、当然啄木にも日蓮に対する信仰のあつたことが知られるのである。

「日蓮が所謂此土寂光の願念、ワグネルの勇ましき愛に多大の同情なき能はず候」(37、1、27姉崎の太陽一号「戦へ大に戦へ」に感激して氏に宛てた手紙)

「法華経よみ玉へ」(37、7、31小沢氏宛書簡)
「仏陀・基督・ルーテル・日蓮等を起たしめたる宗教的墮落の時代は既に逝けりき」(37、11、盛岡中学校々友会雑誌に載せた「秋草一東」)

かような日蓮嘆美の声が出てくるのは当然のことであろう。ただし先にも述べた如く、これはあくまでも既存の宗派の上に日蓮を見ていったのではない。「我は仏徒に非ず、又基督教徒に非ず、然れども世の何人にも劣る

ことなき真理の愛僕なり、信者なり」(37、

1、1、日記)

自づからこう宣言した如く、それは単に樗牛の思想の上に日蓮を見ていったのであり、法華経を愛読していったのであって(この頃法華経を読んだことが後年の日記で知られる)彼はあくまでも新思想でなければ満足しない人間だったのである。

ここで一言つけ加えておきたいことは、浄土宗の某宗乗学者が大正大学の前身宗教大学に於いて宗学講義の際、「啄木が生きておったら、日蓮のことをまだまだ宣伝したであろう」といわれたことがあるということである。これは私がその頃聴講した先学から直接聞いた話であるが、啄木と日蓮の関係を知っていたその教授に敬意を表するものである。

しかし啄木は最後まで日蓮を尊崇しつつけたのではない。日蓮どころか樗牛までも途中で投出してしまったのであって、このことは後述するが、明治四十三年(二十五歳)「時代閉塞の現状」なる一評論の中には、樗牛は日蓮という過去の人間に迷信の偶像を発見したので、彼から青年の心が離れた、と断じて

いるのである。

しかし、とにかくこの頃の彼は、樗牛絶對時代の彼であつて、十八歳、十九歳の頃を宗教思想的に「樗牛時代」の彼、と呼んでもよい程と思ふのである。

宗教に対する啄木の思想 三

そして更に十九歳の晩月から、二十歳にかけての彼には、樗牛及び姉崎から受けた宗教思想、並びに宗教理論によつて彼獨特の宗教論とでもいふべきものを、大いに外部に発表するようになるのである。恐らく今これから提示する資料は、啄木をして單に無宗教主義者だと早断していた人達にとっては驚異のものであらうが、彼の当時の宗教に対する考えを知るに最も好材料とされる、友人伊東圭一郎氏へ明治三十七年八月三日付で宛てた手紙の一編を紹介することとする。

『我々の宗教は昔の人の如く他力教ではならぬ。この世界に神、乃至人間以上の力の實在する事は無論否定する事の出来ぬ精神状態にまで意識されて居るが、それかと云つてその無上者の命令にさへ従ひ、讚美して居れば

次期の生活に於て永遠な、無垢な和楽平等な祝福を得る位の宗教心では、とても我ら有志の人間の本来のネセシチーを満足する事が出来ぬ（中略）人間以上の靈智の力を認め、その力が万有の根源である事を認め、更らに自己も亦その力の分出であると観じその分出が決して無意義の者ではないと観じ、かくて我ら生存の好機を得て、その意義のため健闘し努力するのが、乃ち人間の道であると結歸して茲に第一義の宗教に達し、それから神の力と云ふ者は由来超意識のものであるが、その世界を司どつて居る状態から探入して、神と云ふ者が世界の根本意志なるを悟り、その意志が意力たると同時に又万有に通ずる「愛」によつて整然進歩すると云ふ事に明徹するに至つて、茲に偉大高俊の人格乃ち宗教的人格の理想を確立し、初めて真人の境に呼吸達入して教の奧秘を断定するに至る様に帰着するであらうと信じて疑はぬのである。生は仮りに便宜のため之を人格的宗教と呼んで居る。眞の宗教とは、説教や教論の意味ではなくて、その人の人格に体现せられたる表示の謂である。其証拠には、如何なる偉

大な宗教でも、その宗教史は必ず信仰墮落の記録であるではないか。仏陀や基督やマホメットや、皆高渾無比なる信仰の人であるが、彼らの人格的表示をはなれて何処に所謂仏陀教基督教回々教が存在するか、其人格の勢力が時処を隔てゝ漸々感化の力が直接でなくなるに従つてその宗教が漸々衰頹するのは理の当然である。乃ち我らの宗教は經典を唯一の力とする様な事ではなく、直ちに神に親しみ、神の道のために健闘する底の宗教心でなくてはならぬ。と云ふても生は決して法華經や聖書の価値を云々するのではない。我らは宗教これらの神聖なる書を取つて随意に自家信仰の糧としなくてはならぬ。それから前に云つた「真人」乃ち宗教的人格はキリストや仏陀や乃至凡ての古来偉大なる「人」のうちに見る事が出来自己發展と自他包融、換言すれば意志と愛との完全に表示された者の謂である。兄よ生の生涯の基礎たる信仰は、大抵叙上の様な者である』

以上を読んでみると直ちに知られることであるが、彼の宗教思想は当然法華經の思想を基盤としているのである。法華經は久遠の昔

に成仏した釈尊を、宇宙の真理体とし、この宇宙の理法と一体となった時、その人間も又即身成仏で真理を体得した仏である、と説くものである。啄木の思想は実にこれによるもので、勿論樗牛の思想に動かされたものである。ただその解釈の仕方は新しい表現でなされ、特にそのような理論の上に自我意識を非常に強く認めていることが注目される。そして更に彼の思想は、これを出発点として益々自我の認識ということにどこ迄も高められていったようである。

同手紙は尚も次の如く続いている。

『要するに「我」の生存の意義は天与の事実のために健闘努力して「真人」の人格に到達しやうと云ふにあると信ずるのである。斯の如き真人は、乃ち人に現はれたる神で、その光輝は燦として「永遠」の上に灼やくのである。』

神は先づ人と人との間の「愛」によって永遠に入るの門を開き、無上理想界の神秘の消息を人間に洩らした。而して更に神の大意志の永遠なるが如く我らの意志も亦永存せねばならぬと云ふ人間の本来なる要求によって、我ら人間を遂に「永遠の園」のうちに入

れ玉ふのである。歴史が我らに教ふる斯の如き祝福の人は、生涯不断の健闘者でなかった者はない。ああ思へば、神智の宏大無辺なる、神の愛の渾円微妙なる、到底人間の智の量り知る所ではない。生は斯く感じ、斯く信じて詩のため努力して居る。又将来詩とは限らず凡て我が赴く所にこの信念によって行動しやうと思ふて居る。それ故に我に於ては詩は乃ち宗教である。信仰は乃ち我生命である。我詩の一篇一句と雖ども決してかの歴史的信仰個条と教会の形式とのために生きて居る偽宗教家が百万言の説教に劣る者ではない。若し生が他日議會に立って国家の利害を論議する事があつたら、その財政上の事を云ふに当つても、我言は必ずや彼等偽善者の説教より多く神の旨に叶つてゐるであらうと思ふ』

即ち宇宙の真理を一つの靈智と知覚し、これを神と表現して、その靈智が個人の上に働きかけた時、個人は人格の上にその靈智を体現するのであり、そこには不断の健闘が必然現れるから、この思想に立つ時、自分の詩作も実は神からの活動である、という強い自信

が現れているのであり、当時の彼は、この「自我と靈智」との融合をもつて宗教の窮極と考えていたようである。これは実は強い自我意識以外の何物もないもので、そこに意識される自我を、自分以外の神（宇宙の靈力）によつてもたらされたもの、と勝手に価値付ける危険な思想であるが（現代の新興宗教の中にもこのような考えのことが多い）当時の彼としては、この自他融合の宗教思想が絶対のものだったのであり、事実この思想をもつて前記手紙の如く、自分の生命力ともしていたようである。

右の思想がもっと顯著に現れてくるのは、盛岡中学校校友会雑誌に載せた（37、11）「秋草一束」る文である。

『三尺陋舎の窮屈に堪へざる者は出でて雄大なる自然の胸中に逍遙せよ。紛糾塵裡の生活に倦みたる者は、心眼を開いて無窮なる理想の天上に逍遙せよ、森羅錯然として然も乱れざる自然の胸中に遊びて、人は其処に狭からず窮屈ならざる無限の「我」を見、浩蕩たる天上の光被に入りて、人は其無象の瀾気の中に却りて動かず騒がざる明哲の「我」を見る』

なり。斯くの如くして其心常に時処の上に逍遙する者や、やがて遂にかの三尺陋舎の内、紛糾々々の間にありて、大なる事自然の如く、高き事天凡の如くなるを得るに至る。吾人の最高なる修養、最上の主義とは、ただそれのあるのみ（中略）

無碍禅定の心、一念三千を撰するの徹底も之なり。汝の敵を愛せよの叫びも此処よりは出でずや（略）。ニイチエも沙翁もゲーテも皆これに立脚した、と主張している）

逍遙する者にして初めて創造するを得るなり。斯くの如き創造の人を目して吾人は天才と呼ぶ、乃ち無限なる神智の愛と力の選手なり。生ける涅槃なり（『秋草一束の中の「一、反抗の人」の一節」）

『信仰は無限の權威なり。宇宙の中に我の遍満するを見、若しくは我の中に宇宙の呼吸を聞きて、人と宇宙の融合する境地、之れを信仰とは云ふ。』

一念発意は天の門なり。座乍らにして雲表に歩み、瞑目して地心を洞観す。何等の梯子なし。何等の尺量なし。空にして精微、無にして明哲、直ちに大智と合するが故に、信仰

（童）（心）（仏）（心）

それいけ

やれいけ

梅の花が咲きました。きれいに咲きました。

隣の彼岸桜がこれを見て、花になる子供達にいいました。

「梅さんは立派に咲いたわよ。あんた達も負けたら駄目。しっかり準備するのよ。むこうの八重桜さんも、せっせと用意しているわ。」

花になる子供達は、こう言われるまでもありません。頭の中に夢を画いて、ズーズーとポンプで水をすい上げたりして準備しているのです。それなのに、おかあさんの彼岸桜はぐっと伸ばした枝をふるって、毎日せっかちに子供達に御説教をいいます。（うるさいな。もうわかっていているのに。）」

（少しは静かにしていて、もらいたいな。）

そうです。花になる子供達のいう通りです。愛情を持って、我が子を信じて見守っている。そういうおかあさんであってほしいものです。叱らずに、はめて育てることが大切。（桐）

●人の一挙手、一投足や、乃ち神の愛なり、意力なり、無限の權威なり。

地上の一切の権力、信仰の前に何かあらむ。又かの反理義と云ふ事、人智の発達の上円満に到らざる限り、ただこれ小人の偉大に対する恐怖を語るのみ。螺殼（もく）心中の死語の

み』（同、「四、無限の權威」の一節）

以上の文を以って見れば、当時彼はいかにこの宗教思想に自信をもっていたか、ということが如実に知れるのである。

（未完）

日本人の主食である白米は、元禄以来使われてきたものであつて、昔は玄米または玄麦を使っていた。それも、玄米をいって固くして、口の中でよくかんで食べた。玄米を今の白米みたいに柔らかくたいて食べる

ンもある。これはパロチンというもので、このパロチンは、ツバキと一緒に出てくる。そして、粘膜から吸収されてホルモンとして働くわけだから、ツバキが出なければ、そのホルモンも少いわけである。昔よくツバキを出す人は健康だとか、赤ん坊でよだれをたくさん出すのは、丈夫であると

神経痛が治る。勿論身心が爽快になつて仕事がよく出来るというのである。このフレツチャー主義が非常にはやつて、今でも外国には信者が多い。だから柔いものをかまずにのみ込むのは一番いけない。よくかんで食べる。そしてツバキを出すということが栄養のとり方では、絶対に必要になつて

つまり栄養というよりは、よくかむということが根本である。かむということは、どういふことか

かむことは

長生きのもと

来たわけである。これは日本では、昔からいわれていることで、かむということが栄養の根本である。

というと、よくかむとツバキが非常によく出る。ツバキはもちろん澱粉を消化するいろいろな酵素を

もっているわけである。そして昔から「口

しかし、最近では、よくかんで食事をする。というようなことは、あまり歓迎されない。よくか

先き三寸で消化の運命がきまる」といわれ

いわれたことは、ほんとうであつたのである。

今から三十年ほど前に、アメリカにフレ

ツチャーという人がいた。これがフレツチ

にトーストがはやり、夜は目をたのしませる食事がよるこばれる。そして、栄養価の

消化も、非常にうまくいくわけである。そ

チャー主義というのを唱導したことがある。

れにツバキの中には、成長や健康を保つホ

つまり、どんなものでも百回かめ、そうす

も、かむ方がとくであろう。

ルモンがある。また若返りをさせるホルモ

ると太りすぎが治る。リニューマチが治る。

× × ×

撫^{なで}子^{しこ}の美しさ



高山寺山道

鈴木成元

い、想像していた期待はうらぎられたが、招く自然そのものは実に印象深かった。

って観光客を虎にする商人が多いことも事実である。

私が高尾をおとずれたのは十月の末で紅葉にはまだ早かった。しかし山の入口には数台の

それはともかく、美しい溪谷を後に、急な石段を登って神護寺まで行く距離はかなりある。移り変る周囲の景色に氣をとられながら登ったにしろ容易なことではない。もう駄目

高尾といえは紅葉、紅葉といえは高尾とい

観光バスが並び、首に手拭をかけた老若男女

だといって途中から引き返す中年の婦人連中

うように、高尾の紅葉は有名である。そして

で一杯であった。これらの人々は紅葉を見に

もかなりあった。しかし登りつめて一汗ふ

「カワラケ」投げを想像する人も多いと思

来たのに相違ない。しかし実際に紅葉にはま

き、仏前に詣でる気持は何ともいえない。全

う。しかし神護寺という考えは薄いようであ

だ早いのである。近頃の観光客はそんなこと

く演出効果は満点である。今でさえ人家のま

る。勿論人によってその考え方が異なるのも事

とは関係ないようである。ただ季節によって

ばらなこの山中にどうしてこんなに大きな、

実ではあるが、神聖な真言行者の実践道場で

大体の感じで足を運ぶようである。だから枝

しかも立派な寺院が建ったのかとびっくりす

あった神護寺も、心ない観光客やそれを目当

を折ったり大虎になるのも当然といわなければ

る。それは一口に信仰のあらわれといってし

いの土産物売屋によって全く俗化してしま

ばならない。しかし美しい溪谷にサジキを作

まえばそれまでではあるが、一概に文化の程

度が高かったとはいえない。

今でも世界史の本をみると必ずエジプトのピラミットと中国の万里の長城が写真入りで大きく出ている。そしてこれが古代文化の象徴として取り扱われている。しかしこれは滑稽な話である。成程これらは偉大な遺跡であり、その技術は賞讃されてよいと思う。けれども何故こんなものが作られなければならないかったのであろうか。それは社会の幼稚さを物語るものであるとともに、実は野蛮の象徴であることを物語るものであって、文化の象徴ではありえない。文化が発達していたら決してこんなものは作られなかったと思う。こんなことを考えながら高尾を下りたのは昼も少しまわった頃であった。

水の美しさに気をひかれながら川上に数分歩を運ぶと朱塗りの橋が見える。ここが槇尾の西明寺であるが、この橋はキザでいただけない。しかし実に静かである。槇尾から梅尾の高山寺まではすぐである。以前から高山寺には一度詣でたいと考えていた。というのは高山寺にある明恵の肖像画と鳥獸戯画の厚物

をみたかったからである。明恵は衆知のように質素な生活をした人で高山寺の中興であるが、華嚴・真言・禪等の奥義を体得し、念

仏の精神にも深い理解をもって、東大寺の学頭として華嚴学を講義したこともあった。けれども明恵は宗派や教説に捉われることなく、奈良・平安の旧仏教を総合して新しいものとしたのである。そして釈尊に帰依して本当の仏弟子としてその生涯を貫かれたのである。だから彼の教えは単なる口舌の戯論ではなく、釈尊をしたうあまり厳しい実践としてその教説を実行して行ったのである。彼は決して理論家ではなく実践家であった。学僧というよりもむしろ高僧といったほうがぴったりする人である。それはともかくこの時代は貞慶・俊偽・良観等が出て、新仏教の栄西・法然・親鸞などに対して、旧仏教の復活を計ったのである。その生活の様子を画いたのがこの明恵の肖像画である。

これは恵日房成忍のかいたもので、勿論国宝であり、教科書にまで収められている有名なものであるが、私はこの画をみるたびに何

となく不自然でどうしてもこの画のよさがわからなかった。もっとも明恵に対する知識の不足もあったに相違ない。

兩岸楓木におおわれた川を右に、新しく補装された道路から左に入って、古ぼけた高山寺の門札をよんでいると何となく心が静まった。大きな松の並列する自然の門におおわれた坂道は、苔むした石段が幾何的模様になり、全く形容のない美しさである。そして山道の並木の合間に見える旧廂堂の石垣などを見ると、古い山城の廓の跡でも散歩しているような錯覚におち入る。しかしそこには城址にみられるような激しい圧迫感はなく、老松・巨松、松、楓などうっそうとする木々の暗さを通して来る清風に、何となく柔らかみを感じるのは一人私だけではないであろう。それはともかく、高山寺は清滝の谿流をはさむの一山をいうので、多くの堂がこの山中に散在しているのである。そして明恵はこの山中の樹木や石のうち、坐れるところで坐禅をしたというのである。今でも彼の遺跡として練若台・定心石・遺跡窟・三加禪・禪河院・羅

婆坊・華宮殿等が残っている。国宝である明恵の肖像画「樹上坐禪画像」は明恵の人鏡一如の坐禪の姿を画いたものである。一山の雲囲気にしたりながらこれらの遺跡をまわってはじめてこの絵のよさがわかった。そしてこの肖像画は実に気持のよいものであることもわかった。私は今まで肖像画でよいのは宋の徽宗皇帝の絵であろうと思っていた。しかし趣は変わるが、明恵の肖像画ほど気持のよいものも少ないと思う。実によく雰囲気を出している高級なものであると思う。それにしてもこの絵は有名な釈迦出山図と何処か相通ずるものがあるようである。これは羅漢のような様子をした釈尊が山を下りて説法に行く図であるが、真の仏弟子と自称して釈尊を慕うあまり人里を離れて梅尾の高山寺に入り、坐禪に専心した明恵の坐禪像は姉妹関係にあるといってもよいものである。

高山寺でもう一つ注意しなければならないのは鳥獸戯画四巻である。これは普通の絵巻とは異って詞書がなく、全部墨で書いたものであるが、実にすばらしいものである。これは鳥羽僧正覚猷が書いたということになって、美の内容は常に変転する。そしてまた日本人の取り扱かう美も異なるのである。百済觀音を例にとるとその過程がよくわかる。この百済觀音や推古仏は腹がすいてしょうがないと様子、わけでも仏教界の様子を鳥や獸で諷刺したものであらうと思われる。それはともかくこの画は実によく筆が走っている。平安時代のもものは彫刻にしても絵画にしても大休線が柔らかであり、鎌倉期に入ると躍動的になるのであるが、この戯画の躍動性も鎌倉初期のように思われる。そうすると筆書は鳥羽僧正ではなく、画僧か絵仏師の手になったものではなからうかと思われる。



書 戲 獸 鳥 宝 国

いう感じである。しかしそこが美しいのである。いわゆる腹のすいた美しさである。絵巻にみえるオミナエシの美しさも、現在の若い人々の多くはこの美しさをしらず、もはや、ダリヤとかチューリップのような刺戟の強いものを求めるようになってきている。美の内容は常に変るのである。そして芸術は常に新しい欲求をするところに生れるのである。美の欲求がなければ芸術にはならない。マンネリズムになってはいけないのである。このこ

とは単に芸術の世界だけでなく、私たちのかたわらに横たわる全てのものにいえることはなからうか。

こんな事を考えながら、山を下りることが出来たことは、この思い出を私の生涯により多く残せることを感謝しながら。

×

×

×

×



国宝明恵上人樹上坐禅像

投 機

日常一般に用いる言葉に「投機」(とうき)というのがある。やまをはるとか、不確実な利益を目標として、冒険的に商行為をすることをいう意味の言葉である。最近、問題になっている競輪にしても、競馬にしても、または、大なり小なり勝負ごとは、この投機的なところよりおこる。人間には誰にも、このような気持ちは、多少に拘らずあるのかもしれない。しかし、とかく熱しすぎると、身をほろぼす危険が多い。

元来、この投機なる言葉は、仏教から出たものである。それは、大悟徹底して、仏祖の心機に合することを意味する。そうすると、本来の意味として、この投機が用いられるとしたら、危険どころではない、これ程、得難き心境はない。まことに安心決定である。言葉も、時代の変遷とはいえ、おおいにその本来的意義を失ってしまっている。何とか、もとにかえって生れかわれぬものだろうか。

法然上人の夢告

△瑞(随)蓮▽

村上博了

と伝えられている。

て仰せられけるなり。そもそも上人御素意の赴は……。

二

或る人が瑞蓮に向って、

と経釈の文をひいて、えらそうに語り出したのであった。根が実直な彼は、或はそうかも知れないと思うようになったのである。

一

それは建保二年の(頃の)ことであつた。正月二十五日は、法然上人三回忌の祥

いかに念仏すとも、学問をして三心をし
らざらんには、往生すべからず

三

月に当るので、随所で報謝の法要や上人を
偲ぶ集いが催された。

と言うたのである。

瑞蓮もその集いに行き、上人を偲び報謝

往生は凡夫唯一の願望である、然るに三
心を知らないでは駄目だとすれば、一大事
である。瑞蓮は、

念仏を申したのである。瑞蓮は四条万里小
路に住んでいた。上人の禅房も近かったの

故上人は、念仏は様なきをやろうとす。

で、上人の知遇を得ていた。承元元年四国
へ赴かれる時には、お伴をした程の者であ
った。平生、上人を信じて疑わなかったの
である。御伝には、

ただひらに仏語を信じて念仏すれば、往
生するなりとて、まったく三心のこと
は、何も仰せられなかった

と言った。彼人は直ちに、

当人の学解なりその機根によって、要不
用の別が出るものである。瑞蓮のように、
上人に親しく面受の人には、当然不用のも
のである。

ふかく信受して、ふた心なく念仏しけ
り。

一切に心うましきもののために、方便し

只問題となることは、上人往生二年目
で、早くも、註釈に主点を置いて、一向に
念仏する者を、多少馬鹿にするものがあつ

たことである。

假令瑞蓮が愚直の者として、からかったのであるかも知れない。若しそうだとしたならば、明らかに教団に水を指す者と言わざるを得ない、対機調法のよさを、自ら放棄するものと言わざるを得ない。

四

かつて瑞蓮は、三心と言われ、心にかかって仕方がない。私は愚者だから、上人が三心について仰せられなかったかも知れない。ひいては往生が出来ないかも知れない、上人さへ存生ならばと、思い脳んでいたのである。瑞蓮に対して、上人から夢告があった。このことについて御伝に、

ある夜の夢に、法勝寺の西門からは入ると、池あり、いろいろの蓮の花が咲き乱れて美しい。西の廊下の方へ行ってみると、衆僧列座、浄土の法門をきいてゐる。瑞蓮は上ってみると、上人、北座で南むきに座っていられた。瑞蓮かしこまるを、上人御覧になり、これへとま近に

請ぜられたのである。瑞蓮が言葉を出さない内に、

貴男が近頃、なげき思うこと、ゆめゆめ煩うべきものではない。

と仰せられた。瑞蓮は誰にも言わず心中独りだけの考であるを、どうしてお知りかと思ひながらも、例のなやみを申上げたところ、上人は、

たとへばひがごとを云う者があって、あの池の蓮花を蓮花にはあらず梅だ桜だと云はれると、信ずるや如何に。

瑞蓮は、現に蓮花であるものを、いかに人が云うとて信じましょうか。

上人は、念仏の義も又かくの如し、私が、貴男に念仏して往生することは決定して疑なしと教へたことは、蓮花を蓮花と云う事とかわりがない。ふかく信じてお念仏するがよい。

と教えられたのである。

御伝には、瑞蓮、疑念のこりなく散じにけり。念仏功つもり、臨終正念にして、往生のそかいを遂げにけるとなん。

講演と映画

のつどい

主催 浄土宗教学院

一、日時 四月十六日（土）

午後一—四時

一、会場 銀座、山葉ホール

一、講演

講師 吉川英治氏（交渉中）

一、映画

“河は呼んでいる”（予定）

法然上人七百五十年御忌を明年にひかえ、浄土宗教学院では、記年事業として、右のごとき、つどいを催します。

陽春四月・法然上人のはかりしれない深いところの一端にふれて、すこしでも生活の糧としていただきたいと思います。

信仰相談

解答者 竹 中 信 常

近代科学は人類の将来に無気味なものを暗示していて、人生が味気なくなつてしまいました。

——おたずね——

最近映画にもなり、また翻訳も出ている「渚にて」という小説を読みました。そしてそこに描かれている、原爆による人類の滅亡の物語に慄然としました。

北方から、段々に死の灰が風にのって迫って来て、次々に、人々が原爆症にかかって死んで行く有様は、人類の近い将来をありのままに暗示しているようで、無気味でたまりません。私は昨年学校を出て、社会人として一年を経ました。これから大いに青春を味合い、楽しい家庭生活をも営んで行こうと希望に燃えているのですが、目前に、このように悲惨な運命をみせつけられ

て、急に、人生が味気なくなってしまうしました。

こうした運命をのり越えて進むには、結局「信仰」によるほかないと思います。人類の将来と宗教というものについて質問したく筆をとった次第です。何卒、御回答下さい。(原町田市 中川雅司 二十六歳)

「死というものを見
きわめ、それから生
にたち向って行く事
です。」

——お答え——

「渚にて」という小説は私も読みました。そして、あなたと同じように、その悲惨な姿に胸を打たれました。

米ソ間に原子核戦争が起り、それが色々に波及して、北半球が全滅してしまう。ところが、その後に残った原子核を含んだ灰や塵が風にのって、除々に南半球に及んで

来る。それに見舞われた都会が、次々に破壊する。小説の舞台になったオーストラリアのメルボルンも、やがてはこれに襲われて、小説の主人公達も次々に死んで行くのであります。

現在の科学者達は、こうした状況が起り得ることを否定しません。ただ、そうなるためには小説に書かれている四千七百個以上のもっと沢山の核爆発が必要であり、今日は未だそれ程の貯蔵はないといっています。しかし、「あり得る」ことは確かです。あなたが心配される程にさし迫ってはいたいかも知れませんが、とに角、いつかはそうなる可能性はあるようです。

しかし、問題はそういうことが「いつ」起るかということではなく、そういう事態が起った場合、私共は一体「どのよう」にするのがよいかということにあるようです。その心構えさえしっかり出来ていれば、「いつ」「どこで」そういうことが起っても、いささかも動揺することもなく、また、そうした「可能性」の幻影におびえて、あったら貴重な人生を無意味にすることもないわけです。

あなたもお読みになったように、「渚に

て」という小説には、一言にいつて「すくい」がありません。各人が各様のやり方で「生」を諦念して死に臨む姿が、ありのままに描かれているだけです。酒好きの人は最後まで杯を手にし、家庭の主婦はわが子のベットの寄り添い、恋人は海浜に立って手をふりながら、それぞれの生命を断たれて行くという、その瞬間には無論のこと、そこにまで至る三ヶ月ほどの間の、各人の生活の中にも、神の名も、一言の祈りも出て来ません。そして、当然のことのように、死の床に帰って行くのです。

あなたが、やり切れない気持ちになられたのは、このためなのです。この世の生涯は必ず終りのあることは、私共もよく知っています。しかし、その終りが、いつ、どのようにやって来るか、分らないところに、また一つの「なぐさめ」があります。自分の死期と死の様子とを知るものに死刑囚がありますが、死刑囚でさえ、その大部分は何らかの形でその死を解決しています。信仰によってか、あるいは他の何かによってです。死刑囚からそういったものを奪い去ったら、おそらくは氣を狂わせてしまうでしょう。

ところが、「渚にて」の中に出て来る人々は何も与えられてないのです。だから、やり切れなくなるのです。折角、長い学校生活を終えて社会に出て、これから真実に人生の楽しさを満喫する矢先に、このように暗胆たる情況を予想させられたのでは、本当にたまらないことでしょう。

人間は、死という限界をのり越すために色々の方法を考えましたが、いまだ一人としてこれをのり越えたものはありません。それは「死」というものを、通らねばならぬ「関所」のように考えるからなのであります。自分というものを「ここ」において死の関所を「あちら」に想像することから、死というものを、何か自分とは別のところにあるもの、そして、やがてはそこへ行くものと考えようになるのです。ですから、何とかして、そこへ行かずに済ますように「もがく」のです。

ところが、死というものはそんな遠いところにあるものではない。生の裏側にとびつたりとくっついているものなのです。生れるからには死なねばならない。死は生の反対側にあるのです。このことは仏教で、「生死一如」といっております。

ですから、それは、原爆が落ちようと、おちまいと、死の灰が降ろうと降るまいと、着実に私共と共に一步一步人生を歩んでいるのであります。青春の希望に満ちたあなたに、このようなことを申すのは、少し残酷かも知れませんが、真実のことなのですから、あえて申します。

こうした、生死の關係をはっきりと体認するには、禪の修行もよろしいし、その他色々の宗教的方法がありますが、ここでおすすめしたいことは「念仏」による方法であります。

現実はいくまでも厳正に認めねばなりません。現在私共にくらかっている原爆の危機については、あくまでもこれをはっきりと知らねばなりません。と同時に、ただ、これを仕方のないことだと諦めてしまふのではなしに、そのような危機にさらされつつも、なお生命の尊さを抱きしめて、大いなる無限の生命の存在を確信して行くならば、現実の虚無感に押し流されることなく、立派に信仰の「彼岸」に到達することが出来ることを、信念を以って申し上げます。

単直仰信の行者

——元祖法然上人——



北 出 立 仙

承安五年春三月、大地は春の瑞氣満ち、山野に百鳥さえずり、百花又研を競う吉祥京洛中にみなぎり、文武百官百姓我が世の春を喜ぶ。それは何の故か、それは外かならず、大勢至菩薩の再現、和朝の釈尊、智慧第一の法然房、比叡三千坊の大棟梁と世人崇敬をあつめ、遂には三朝天子の戒師となり、無位無官の一野人が殿上人の礼を以てされし法然上人の浄土宗別開の宣言を開かれた故である。

浄土宗の開宗は日本仏教史上特筆大書すべ

き大宣言であった。之によって日本仏教史がかきかえられ、鎌倉時代以後の新らしい宗派の發生の原動力をなしたのである。西洋歴史上、独逸の聖マルチンルーテルのキリスト教の宗教革命が世界の思想界を一変し、世界の一大転換期をつくりし時より、すでに約二百年も前に東洋の一角日本の空にルーテル以上の大変革の宣言をなし、宗教界に思想界の上に大発見をなした単直仰信口称念仏の一行、これを以て仏教の根本原理への到達すべきの

道とし、この一行によらずんば救済の途も失われ仏と衆生との関係も絶たれ、ついには仏教の無用視までいたるであろうと説破し、當時八家九宗蘭菊その道をきそい、わが仏のみ尊しと独断に陥ちし所謂担板漢流の仏教界に、一石を投じ以て既成仏教団の長夜の夢をさましたのは、原子爆弾投下による現代人の驚きにも勝るものであった。

法然上人は普通人間的に眺がむればまことに一生を通じて苦の連続であった、徹底した苦惱のうちに人生の姿をみつめつくされた一生とも云うべきでもあらう、之の人生の苦惱を体験した必眼にうつったものが他力救済の大誓願として生れたのである。上人は九歳にして慈父に人間のにくしみ合う情により生ずる人間界の悲劇即ち争う犠牲として父と死別し、十五歳にして慈母との生き別れ而して死別し幼にして独生独来独去のさけがたい人間の運命を味い、この事実が所縁となりて仏道修行の志となり、当時の学問所であり仏教研究所でもあった天台の比叡山への遊学となつたのである。法然上人の比叡山にての生活、修業の態度は、真剣勝負そのものにて一瞬も

亦おしみ、春夏秋冬のうつりはあれど上人の看経而して僧侶としての修業は、敵中に行動するの者の如く油断なく死して後止まんの不借身命の決意がみなぎってあった。天台三大部を手はじめとして八家九宗の研究は勿論世事百般の学問に精勵せられ人間修業には人一倍の境地に到せられし故に日ならずして比叡一山の人々より、敬意と尊敬と信頼とをかちえて、天晴れ人の師表としての資格を身につけられたのである。

しかるに、我が身の声望が高くなればなるほど法然上人の心に去来する思いは、悲痛の一事であつた、仏教の密林に智慧のまなこを開きて入れば入るほど学問の深さに驚き、自己の智慧の有限に心づき、信行の上に自己自からを眺めるの時、自己の劣機に心づき遂には必墮地獄の自己に涙をするのであつた。この上人の真剣なる求道の世界にある当時の仏教教団は、形式化され、迷信化され、階級化され、仏教本来の濟世救生の事は、山に魚をもとむるの如き難事であり、結局正法隠没正覺の大音響流十方は昔の夢となり、外は貴族階級の歿落武家階級のタイ頭政治の不安は日

本全国戦災又天災、安き日一日もなく草木愁色を帯び戦々競々薄氷を踏むと云う世相であつた。

かかる時代的背景にいきた法然上人は、求法の精神に終始一貫昼夜寸陰をおしみて精進し自己の得脱は勿論、亡き両親への追恩のためにも一日も早く心のあけを期し、万民とこそを得て安き日歎喜更生の日をもたらさんと祈願の心に燃えられたのである。天台比叡の山の勉強、山を下りて嵯峨釈迦堂での断食の御参籠祈願は、アノクタラサンミヤクサンボダイの仏たち我れに冥加あらせ給えと、比叡の山開きに諸天神に至誠の心をささげられた伝教大師の心にも比すべき熱烈なるのもであつた事と思う、又ある時は、南都奈良への求法の旅となり、三論華嚴真言の各宗学匠訪問の求道の旅は、青春の去るを知らず、一意専心、濟世救心の悲願達成のためであつた。かくして二十有余年の間、人間釈迦の探求、人間の宗教、ありのままの救いの大道は、いかなるものなりや否やとの、やるせなき衆生濟度のためであつた。このやるせなき上人の超人的所願は、天神地祇も感動してか、釈尊

の仏教宣言の十二月八日の「奇なる哉奇なる哉一切衆生皆悉く如来智慧を具す而も迷惑して覺知せず」云々の豁然と大悟徹底、仏性平等無我報恩の理にめざめられた。その法悦そのままの、心のあけを法然上人は、唐の善導大師觀無量寿經の御疏の中、即ち「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざるものは是れを正定之業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」と云う三十余文字の発見が、浄土宗の開宗の動機となり、一切衆生、悉有仏性、成仏国土、成就衆生の仏教本来の目的は、單直仰信、口称一行の念仏によりて初めて可能であると宣言されたのである。

法然上人の念仏は、選択本願の念仏であり、この念仏は、我が機根、我が智力、我が能力についての徹底的反省の結果生れたものである。この自己反省は又凡ての宗教の基礎となっていることは論をまたぬが特に上人の浄土教は、この点を最も強調している、上人は「我れはこれ烏帽子もきざる男なり、十惡の法然房、愚痴の法然房が、念仏して往生せんと云うなり」と自己を掘り下げ掘り下げて

一善もなし得ぬ自己にぶつかり、その厚き越え難き壁を通して、大愛の弥陀の三恵を味到されたのである、まことに我等は悪をなす時は寝食を忘れ、善をなす時は起居みなわずらわしい、この思いに尊い人生を空過して愧じざる現実の生活に涙を禁ずる事が出来ぬ。善導大師は、一つには決定して深く信ず、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流転して出離の家あることなし。二つには、決定して深く信ず、彼の阿弥

順し得てかつての暗く淋しい人生からぬけて今は生きる欲び生かさるる欲びに生活する一求道者が、或る法筵のみぎり、「道を説く人曰く、この一堂の聴衆の中に、地獄へおちる人が一人居ると、いいしとき念仏によって救われている一人が、ハイハイその者は私でありますと答えた。又この中に極楽参りの者が一人居ると、その人が又その極楽参りの一人は私でありますと答えた」この信の境地こそ他力信心者の境地である。

陀仏、四十八願を以て衆生を攝取したもう、疑いなく慮ばかりなく彼の願力に乗じて定んで往生することを得と。機法二信の信心が、

念仏弘通の先覚者であり、法然上人も念仏の善知識として崇敬を払われし比叡山横川の恵心僧都は、妄念はもとより凡夫が地体な

無明の暗に自己本心を失い、一生名利の林にさまよい歩く愚に覺醒せざる我等、早く招換の声に心耳を傾け、常に彼の願力に乗じなば阿弥陀仏は、常に我と共にいまし、平和な時は清楽の友となり、失意の時は大威神力を以て我を慰め、暗患の炎起る時は歡喜光もて暗を照し、貧欲に悩む時は清浄光を以て之を洗い給い、即ち觸光柔軟、歡喜踊躍の心となり、苦の世界に住しながらも、光明界に遊び、三垢の雲はれて、天地開明一木一草吾れを生かすためへの寂光浄土さながらの生活が展開されるのである。

法然上人の心に咲いた時、必墮地獄の自分も、極楽に生れる選らばれた人の中に加わる資格あるものと云う大確信を得られたのである、この念仏の一道こそ一切の悩める人々の救わるる唯一つの門である。他力念仏をすすめんためにこの法然は世に出世したのであると、半生の諸々の行をなげすてて結歸一行三昧、ただ念仏行者として生きられたのである。

り、妄念の外には別の心もなきなり、臨終の時までは一向に妄念の凡夫にて有るべきと心得て、念仏すれば来迎にあづかりて、蓮台にのる時こそ妄念をひるがえしてさとり的心とはなれ、妄念の内より申し出したる念仏は、にこりに染まぬ蓮の如くにして決定往生うたがいあるべからず、妄念をいとわずして信心の浅きをなげき、心を深くして常に名号を称うべしと、教誡し給う。おそるべきは、無信の徒、我慢、我見、我欲のとりことなり、

の本壤、群生群盲の帰趣を明示され、末法時正法滅せんの時、仏法繁昌の基をつくられてここに七百余歳星うつり歳かわりて、今上人御忌七百五十年を迎えんとす、千載一遇の祖上人追恩報恩の至誠を表示するの時、念仏の流れに浴するの未徒慈恩酬答の覺悟如何!!

念仏の信仰を、よき人のすすめによりて信

の徒、我慢、我見、我欲のとりことなり、

形装隨所に散見し、人民塗炭の苦しみに陥入

り、我欲の徒天下に往来し、宗教信仰地を払う、国民挙げて救世の主を待望する今日を於て切実なるものはない、上人の還来穢国土を祈願するは、余一人のみではなからう、幸いなるかな、この嘆きに答うるに法然上人は在世の時、跡を一廟にしむれば遺法あまねからず、予が遺跡は諸州に遍満すべし、ゆえ如何となれば念仏の弘通は愚老一期の勸化なり、されば念仏を修せんところは、貴賤漁人がとまやまでも皆これ予が遺跡なりと、口称念仏の声するところ、念仏の生活を営む人民のおるところ、生身の法然上人は、影の形にそい昼夜の別なく行住坐臥我等と共に生き我等と共に天下国家を憂い、世界平和実現の為に動いて下さるのである。

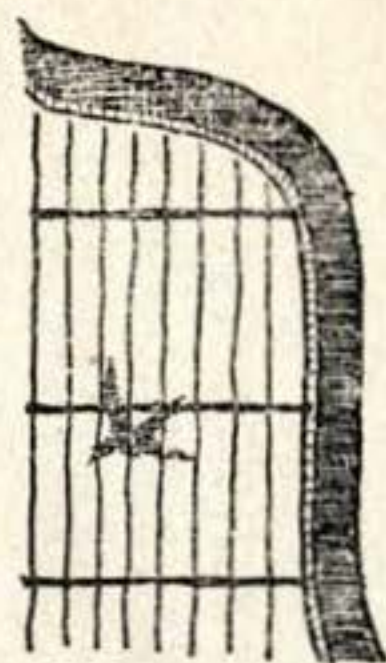
岩もあり木の根もあれどさらさらとたださらさらと、水は流るる、行雲流水の境地にいて、天地大自然の三恵の中に、弥陀を発見し、弥陀のミ子としての聖業分担の役を果し、念死念仏の理念に徹底し後生一大事を確信、苦楽一如、生死一如の如来慈恩中に生活することの出来る我身を歎ぶべきである。

ひな祭り

今でこそ女の児の優雅な祭典とされていゝる雛祭りも、もとは老若男女の別なく行つた「厄払い」の儀式で、今もあちらこちらの村に見受けられる、人形送りの形態――疫神送り、風の神送り、虫送りなど――の転化したものです。従つて愛知、鳥取、琉球等に見る、所謂流し雛の系統が本来の形でした。桃その他の花々が咲いては散る、春に移る季節の頃は人の身の上にも兎角災害の生じ易いところから、紙や草や葉などで人形を作り、これを形代（カタシロ）として、私達の罪障や災厄を払おうとした、所謂、「贖物」（アガモノ）の人形が雛人形の原型なのです。こうした季節的な厄除行事は、洋の東西を問わず行われたもので、歐洲でも丁度新旧二度の雛祭りに近い頃、謝肉祭の最終日と、それに続く四旬齋の第四日曜日とに、謝肉祭の埋葬と死の追放と何れも、人形を焼いたり流したりする二つ

の行事が見られ、支那では上巳の節句を春の禊の日として、流水のほとりて禊祓とか禊の飲とかをするのが古来の風だったのだ、これが日本に伝わって、平安朝の巳の日の祓となり、曲水の宴ともなりました。例の湖干狩の風習も、初めは雛祭りの禊祓だったのだ、現に雛遊びの日を磯遊び、磯祭りと呼ぶ地方も多く、また蛤や浅蜷などの貝が、古くから雛の供物とされたのも、これから関聯があるからで、今でも出雲では胎貝のことを雛の貝と呼び、伊豆でも雛段の前での女の児のままごとを磯遊びと云うそうです。九州の五島でも山磯遊びとして、この日磯や山で酒盛をする風があり、その他野辺節供とか春遊び、花見正月などと呼ぶ所もあって、広く野山に遊ぶ日とされておゝり、町場のお花見も、元来はこの春の儀礼の転訛した姿と見られるのです。私達もたとえ美しい雛飾りは持ち得なくとも、せめて親子楽しく野外に遊び菜や連翹の花とか大黃の葉などで草雛でも作って、素朴な雛流しに興じて、子供達の健やかな生長を祈る一時位いは持ちたいものです。

釈尊の生涯 (八)



佐藤密雄

七、仏陀と仏教

仏教は無教主である。宗教のもつ性格は、その教祖の性格がつよくあらわれるといわれる。教祖を知ることが、その宗教のなかばを知ることにもなる。

私どもは、仏陀釈尊の生いたちや、その教養をみるとき、ほかの宗教の開祖たちとは大きく異っているのにきづく。それがまた、のちの仏教の性格としてあらわれていることが知られる。

釈尊の入滅の近づいたときに、秘書の阿難は、仏陀入滅ののちの仏教サンガのゆくえを案じた。そして、いちばん大事なことは、仏陀につぐ第二世の教主にだれになるかと

いうことであった。多士済々の仏弟子のなかから選ぶのはきわめて困難であるが、仏陀が入滅されるまえにだれかを指名したならば一番よいと考えられた。おそらく、阿難がそのことについて聞いたのであらうと思われるが、伝記では、阿難のそのような心配を知った仏陀は、いまだ阿難が問わないうちに、仏滅後のサンガについて、その考えを示されたといわれる。

仏陀は、阿難にむかって、自分には教主の握拳というものはなから、教主の必要はないとされた。握拳というのは、バラモン宗教の諸派で、弟子にも信者にも知らさずに、ただ教主となるものにだけ、秘かに伝える秘義である。この秘儀を伝えて掌握しているものが教主であり、教

主となったものは、これを依り処として、いろいろな問題に對するのであるが、仏陀には、そのような秘儀はないから、それを伝える教主の必要もみとめないのである。

そして、仏陀は、弟子たちに、汝自身をとしびとし、法をとしびとし、他に依ることなく、よく自らを調えるようにおしえられた。これは、自燈、法燈の二燈明のおしえといわれるものである。自燈とは個人の自覺であり、法燈とは仏陀の説かれた真理のことである。この二燈明のおしえが、教主をたてない仏教サンガの依り処として、説かれる仏陀と、その教えに特徴がある。すなわち、仏教では、各人みずからが、ちよくせつ仏陀に目ざめてゆくところに、悟るという仏教の事実があるのである。

真理をとかれた仏陀は、一般の宗教々団の教主とはおおいに異って、仏教には教主というものはなく、したがって、仏陀の滅後も二世教主を推せんする必要はなかった。阿難をはじめ弟子たちは、仏陀こそ仏教の第一世教主であつて、その第一世教主によつて、二世教主が指名されるならば、サンガの平和のために、もっとものぞましいことと考えられた。しかし、仏陀は、自身もまた、仏教の教主とは考えなかつたのである。

仏陀すなわち覺者としては、いろいろの教法や規律を説かれたが、一人の釈迦族出身の沙門としては、その教法や

規律にしたがう一員であつた。そしてさらに、仏陀として説くべきことはすべて説きおわつて、いまだ説かない秘儀というものは、まったくなかつたのである。

ゆえに、すべて真理は公開されたのであるから、おのは、ただ真理を支柱として、これに目ざめてゆけばよいのであつた。目ざめるためには、教主の指導の必要もなく、神のゆるしや神のちからを借りる必要もなく、そこには、教主も神も存せず、ただ、人と、悟るべき真理とがあるだけであつた。

仏教に奇蹟はない 仏教の法は神からあたえられたものではなく、人間の生きる事実のなかに、釈尊がみいだされたものである。その発見も、神のたすけとか、神祕的なひらめきといった、奇蹟的な方法によつたのではない。それは、人間として健全な知力で認識され、見いだされたのである。

その発見は、釈尊の出家ののち六年間の修行に見られるように、おおくの宗教思想について、充分学び、慎重に批判して、のちにみい出されたものである。また、成道の説話の降魔ものがたりが象徴しているように、感情や感覚に支配されて、理性の正しさをうしなうことのないように、充分努力がはらわれた。

したがって、みいだされた法はもちろんのこと、その法

の発見の仕方についても、神の力によってたすけられたと
いうことは、全くない。仏教には、原則として、万能の救
主とか、それに対する、祈りや、さんげは成り立たない。
また、神と人間のあいだをむすぶ意味の教主や、奇蹟のご
ときものも成り立たないのである。

仏教以外のほとんどの宗教は、天上の神からあたえられ
た、いわゆる天啓の宗教である。

これらの宗教は、天なる神と地上の人間のあいだにあっ
て、両者を媒介する半神半人の存在が必要である。これが
教主といわれるものである。それは、神の世界と人間の世
界とは、まったく異質なものである。神において合理的な
ものは、人間には不合理であり、人間の理知は、神におい
ては世俗なものとしてかえりみられないものだからであ
る。

そこで、このような宗教をはじめて地上につたえた開祖
たちが、神から宗教を授かるのは、おおくは神がかりの状
態によってである。これは、人間の立場から見ると、病的
で狂気とも痴呆とも見えるし、また、そのような状態にな
る人は、生来、狂的か、異常か、遍質的であり、しかも、
おおくは教養であり、反理性的である。

しかし、これをその宗教の立場からすれば、そのような
人こそ、世俗のけがれた知識に溺れない人であり、素質が

異常にみえることこそ、神の告示を受ける超人的素質のあ
らわれであって、神の立場からは、人間のなかでもっとも
すぐれたものとなるのである。

すなわち、ふつうの人からみて、非合理的な欠点と見られ
ることが、神の立場からは合理的な神聖な点とされる。そし
て、このような開祖の立場をうけつぐものが教主であるか
ら、教主もまた、開祖に準じて、人間的に不合理な面で神
に通じて、その半面の人間的な面で人間に接することにな
るのである。

仏陀には奇せきというものが、まったくなかった。神を
信ずる宗教では、奇せきこそ神のかぎりなき力と思寵とを
知らせるものであるが、神を認めず、真理に生きる仏教に
は、それを必要としないからであろう。がんらい、奇せき
とは、神のがわに立って説明すると、合理的であるが、神
と考えたのちがう人間からみると、不合理であって、こ
れをあやしむか、信ずるかのほかに理解しようのないもの
である。

たとえば、イエス・キリストは十字架のうえで殺された
が、歴史上の事実とすれば、自分で万能の教主（キリス
ト）であると自負したにもかかわらず、時の為政者から不
穩の言動があったとして、とらえられて死刑になった事件
である。しかし、これを使徒パウロが解説するところによ

ると、神が自分の子を地上に降して、地上の人間の原罪を贖う（身がわりになって、罪をつぐなうこと）ために、十字架上に血をながして死んだという。その証拠には、イエスは死してまもなく、天にかえったのであり、その死体を埋めた墓をみると、死体はなく、ただ死体の着物だけしかのこっていなかったという。

そこで、イエスによって贖われた人間の原罪とは、なにかというと、人間のはじまりの祖先であるアダム（男性）とイヴ（女性）が、神の禁止をおかして男女が交情し、はじめて子どもがもうけられ、人間種族が保存されることになった。そのとき、神からは、命にそむいて男女が交合したことが、人間の原罪とされ、人間の子孫はすべて、生れながらこの原罪を荷負っており、罰として生死せねばならないことになっているというのである。

男女が子供をもうけることが罪であるということや、子孫が祖先の罪の罰をうけることは、仏教的に理かいしがたいが、さらに、イエスがたとえ神の子であったとしても、時の為政者に反抗して死刑になったことが、どうして人間の原罪をつぐなうことになるのか、神は万能であるのに、人間に原罪があるとしても、それをゆるすのにどうしてそのような惨酷な形式を必要とするのか、まったく理かいしがたく、人間のがわからは不合理にみえる。しかし、その

ように不合理にみえるところに、人間には推測しがたい神の施設があると信じられ、宗教信仰のうえからは、重要な信仰の根拠となるものである。

ところが、仏教では、そのような奇せきはみられない。たとえば、仏陀の生誕や成道の降魔などに神話的な表現があっても、それは、ふるい二千年以前の表現の方法である。よしんば、それが事実としても、そのような神話的なことは、釈尊の誕生や、悟りの方法に関することであって、教えや、すくい道の中心をしめるものではない。

キリスト教では、十字架は神学の支柱であり、これを通じて神学が成立し、人は救われるのであって、イエス個人の伝記上の行動が、キリスト教の神学の要素となるのである。

仏教では、仏陀の伝記や、個人的行動にいかなることがあっても、教理に関係はない。もちろん、仏陀が、人間から仏になった事実だけは重要なことであるが、しかし、この事実こそは、仏陀の説いた教法にしたがって、それによって、真理を悟れば仏になれるという実証であって、これによって、仏教においては、仏陀の個人的な事情はともあれ、だいじなのは、仏陀の説かれた教法であるということになる。

仏教は地上の宗教 おおくの宗教の世界は、この人間の

地上の世界をはなれて、天上の神の世界であるとされる。

仏教では、そのような世界をもとめずして、この地上の人間の世界をはなれずして、そこにみいだそうとする。おおくの宗教にとっては、人間界と、神の世界との二元であるが、仏教では、この世界の一元を原則とするのである。

神の世界と人間の世界の二元をたてる宗教には、この二元をつなぐ、中間的存在が必要となるから、半神半人の神の意見もききうるし、人間の心もわかる教主が必要である。また、神から人間へはたらきかける手段として、奇せきも生ずるのである。

イエスは神の子で地上に來たり、そして神の世界へかえったのであるが、仏陀は地上に生まれて、地上で仏となり、地上に死したのである。

しからば、釈尊が仏となったことであるが、仏陀は、成道以前は人間釈尊であって、三十五歳の成道以後は、仏陀釈尊であった。

一応の区別をもっていえば、三十五歳までは人間の世界にあり、三十五歳以後は仏の世界に住されたのである。さらに、三十五歳までは有限の生命で生死をさまよう人間であったが、三十五歳以後は、不生不死の永遠の仏身となられた。

しかも、それが、同一の世界で、同一の肉身の上に現ぜ

られた事実であったのである。

仏陀の自覚 仏陀は三十五歳で成道すると、自分は、生死を解脱して不死金剛の身をえたので、自分の身は、もはや雑食の身ではない、と述べられた。つまり、自分は、もはや不死の身をえたのであって、その身は食物を食して維持する身ではなくなった、とせられた。

しかしながら、そのように述べられた、仏陀の肉身は、人間釈迦の身とはなんらの質的な変化はなく、肉が金剛石に変わったのでもなく、また、雑食の身ではない、と述べられたが、いぜんとして、食物を食する雑食の身の生活をなされたのである。そして、なによりも不死の身となった、と述べられたにもかかわらず、老年とともに若さをうしなわれ、八十歳で、入滅されたのである。

その死にのぞんでは、自分の肉体の死を他人の死でもあるかのごとく、肉体の死することは当然のことであり、悲しむべきことではない、とされた。

しからば、このような矛盾を、どうして解釈するか。この矛盾こそ、ほかの宗教の奇せきにかわるものと考えられるのではなからうか。仏陀が、死する肉体を、生きつつ不死金剛の身をえた、と述べられていることは、悟りは、肉体の変化ではなくして、精神上の変化であることを明らかにされているものと考えねばならない。

それは、夢の世界が、夢をさめて、現実の世界となったようなものである。この場合の夢の世界は、三十五歳成道以前の人間釈迦の立場に比すべきである。

さらに、譬えていうならば、一輪の花として生きた人間釈尊は、成道によって、花として生きる立場から、木として生きる立場へ転ぜられたような、精神の展開があった、ともみられる。花の立場にたてば、はかなく散りゆくことは悲しいことであるが、しかし、花を咲かせ、実をむすばせて成長する木の立場に立てば、花は咲きおわって、散らせて実をむすばせねばならないのであって、花や、果実や、葉が生滅することこそ、木の生き生きとして成長する、ありさまにはかならない。

六尺の身に固執する人間は、この身とともに死する悲しみをもつ。しかし、この身を生かしている世界を身とする立場にたつて、万物を生滅させる道理に生きる立場にたてば、この身を活用して、老死せしめねばならず、また、万物の生滅することこそ、大法界身の生けるすがたがあることとなるのである。

仏陀の悟りそのものについては、かるがるしく論じがたいが、その生きる立場については、六尺の身とともに生死する立場から転じて、万物を生滅させる道理を立体的に、生当世界身の立場にたつて、ものを見、ものを生かされた

のである。そのことが、人間からみて、六尺の身に變化のないにもかかわらず、不死の身をえて、もはや、雑食の身でないと言われたゆえんであらう。

また、仏陀は、三界はわが身であり、いっさいの生けるものは、わが子である、といわれたと伝えられるのも、おなじ理由にもとづくことである、と考えられる。

このような、仏陀の思想の立場は、仏教をして、感情的な面よりも、理知的な面のつよい宗教とならしめた。

キリスト教などにおけるように、情熱的な面がすくなく、十字軍のごときはもちろんのこと、宗教のために血をながすようなこともすくない。また、同時に、異教徒を憎悪したり、排けきしたりすることもなく、他教にはきわめて寛容であり、いかなる思想をも、いちおう、その理論を認めようとするのである。

また、仏教のながい歴史においては、実践形態のなかに、浄土教や密教のごときを発生して、救済、祈り、さんげなどの感情的な信仰を重要な要素とするものを、おおく発生することになるが、しかし、そのようなものにあつても、常に原則としての理論は、忘れることなく反省されているのである。

たとえば、浄土教のごときは、他力信仰によって、西方浄土往生を説くものであつて、きわめて、キリスト教信仰

のかたちに類似しているといわれる。しかし、その浄土教も、原理（主義）をおしえるときは、往生は無生而生（生ぜずして生ず）ことであるとして、觀念の悟りが内面の意義であることを説くのである。

また、密教も、いろいろな事相を説いて、如来力の加持をねがうのであるが、しかも、原理としては、即身成仏をおしえ、觀念的な転心によって、現実世界はそのまま仏界であることを説くのである。

このような点は、感情的な信仰の論理からいって、かならずしも優れているか、どうかは、おおいに反省されねばならない。

理論性は、冷静にものの正しさをもとめるものであり、信仰は、純心に情熱的になろうとするものである。

仏陀釈尊の思想において、後者の傾向のきはくであることは否定しがたいようであるが、そこに、あらたに慈悲をとく浄土のおしえの展開がなされるのである。

—— 完 ——

（著者 大正大学教授）

昭和三四年度版

浄土宗寺院名鑑

A5版 三五〇頁
送共 二五〇円

内容 寺名 等級 住所 電話
資格 分限 卷末に宗教法人法及び宗務所宛申請届出様式等掲載

東京都港区芝公園十九号地

申込所 浄土宗務所財務部

田村円澄 著（九州大学助教授）

法 ほうねん 然

人物叢書36
新書判・美本
定価二〇〇円
送料二十四円

絶 賛 発売中

浄土宗の開祖法然、日本仏教史の転回点に立つ聖者である。宗祖の立場は常に苦難の道であつて、彼も例外ではない。しかし法然の門流が多くなるにつれて、法然像もまた神秘化され、ヴェールを脱し、あるがままの人間法然を描き、執拗な弾圧に抗する苦悩と実践とを如実に追求した力篇。

東京都港区芝公園十九号地

申込所 浄土宗務所教化団中央本部

振替 東京六一九三九番

新編 百 喻 経 (三)

七 選挙親類

××町会議員の選挙が始まったある日、
U候補がやってきた。

U「伊東さん、お宅と、私の所とは、親類ですな」

という、

私「へえそうですか」

そこで彼の説明をきくと、平清盛でも、源頼朝も、日蓮上人も、石川五右衛門も、近藤勇も、高橋お伝でも、みんな先祖になりそうな、筋合と知った。

ふだん口もきいた事の無い奴が、選挙の時だけは、一ぱしの親戚気取りでやってきて、

「せひおあそびに……処でどうぞよろしく……」

そして当選してしまったら

「ヤァー……」それだけだ。

あほらしゅうてあほらしゅうて、……………。

八 置き引き

さきごろ、N駅で、置き引き（そこにおいてある物を盗む賊）がつかまったのを見た。

現行犯で捕えられるのだが、

「これは自分の物だ」

といって逃げようとしたが、派出所へ連行され、ここでちょっと取調べられた。

刑「おまえのものなら、中は何だか判ってるだろう、何だかいつて見給え」

賊「……」

自分のもので無いから、無論答えられなかった。

いくら立派でも、受け売り理論では、身につかない、訥々と語っても、体験を語る強さを知れ。

九、似た者夫婦

Uは、自分の両親に、絶対服従で、自分

の両親程、立派な者はないと、思っているのだった。

私も、彼から、両親をたたえる言葉を、よく聞かされたものだ。

無論これは悪いことではないし、これを悪くいうのではない、しかし、彼の両親に關する限り、

「一寸待って！」

といたい。

彼の父親は、広告詐欺で、相当の財を貯えた……そのため何年間かを入獄したのだが、そしてその妻は、夫が入獄で留守中、他人の妻となって、相当に稼ぎため、夫が帰って来た時は、二人の資産で、大地主・家作持となっていた。

此の事実を知っている人々は、Uが自分の両親をほめると、かえって軽蔑するのだった。

とかく物の批判は、真実を知らずに、自分の感情だけであることが多いが、注意すべきだろう。

（伊東挙位）

会員だより

毎月本誌を鶴首している私ですが「今度はどんな表紙絵だろう」も一原因。その結城天童氏の先生、川端龍子画伯は、私の幼時の愛読誌「日本少年」の表紙、口絵をズーッと描いておられた。流麗なタッチ、ガッチリした構図、豊富な色彩。中でも今だに脳裏に刻みついている原色二頁大口絵。

大きな画面の殆ど一ぱいに黒っぽい空洞、ぐるりは、白雪におおわれた山肌で、笹や赤い木の実などがチラリホラリ覗いている。洞間の上方にうっすらと白い三日月形が浮び、その少し上には星の様なものが二つ。ずーっと下って中央や、下辺りに、ポツカリほのあかく円いものがあり、その中にも小さく星状のやはり二つ。

よく見るとそのほのあかいものは少年の顔で、星とみたは二つの可愛い眼だった。少年は黒い大きな動物の手でしっかり温く抱かれていて、もう一度上方を注意してみ

ると、三日月形は大熊の頸筋にある月の輪で、その上の二つ星は即ち熊の両眼だった。題して「熊に助けられた少年」。

私はその絵から有難い仏面を連想した。じーっと見ていると、知らず知らず涙ぐましくなり、見飽かない。今にして思えば私の信仰生活は、この絵に接した瞬間から芽生えたのかも知れない。それまではただ、形ばかりの合掌だった様な気がする。

処が其絵は雑誌諸共学友が、無理からぬ理由の下に失くしてしまい、悲しさの余り幾日も秘かに一人で泣いて暮した。本屋にはすでに無くても、東京の発行所に注文すればよい筈だけれども、同じ雑誌を二冊買う事は、とても両親に持ちかけられず、今だにフツと想出しては淋しい思い。死ぬまで忘れられそうにない。

山口県 合田徹雪

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 四円)

会費一カ年

金六〇〇円

(送料不要)

浄土

三月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十五年二月廿五日 印刷

昭和三十五年三月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬 秀雄

発行人 佐藤 密雄

印刷人 神谷 秀雄

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都品川区上大崎一ノ七八二

発行所 法然上人讃仰会

振替東京八二一八七番

The testimonial
from the governor of
Kyoto
awarded to
U. NAKAMURA,
the director



The letter of
gratitude from
the Mayor of
kyoto sent to
NAKAMURA FUNGUS
CHEM. LAB.

中村医学

中村医学必携
実験写真入ア
ト縮本贈呈
御申込下さい！

医学ニュース
中村医学の学理を
世界に発表さる
大阪医大の名誉
教授谷村博士は
兼て中村菌液の
実験を実施され
その卓効力を刷
新論文に英訳さ
れて全世界の医
学界に報告の光
榮に浴しました

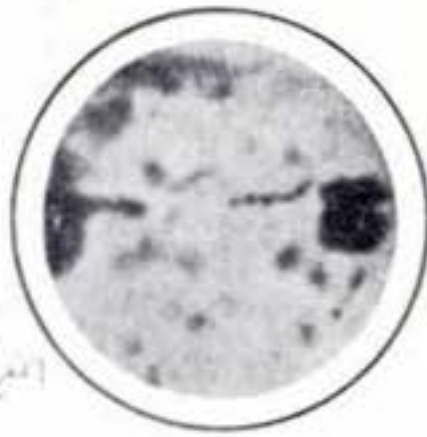
全治に実力作用する特
許フザリユームの解毒
から病原の淘汰作用！
発生シワルツマン因子
の滲透から再生作用！

中村医学にて難病の治る真理

中村医学の基礎



恐るべき耐性菌を崩壊淘汰する



滲透するバクテリア層を完全淘汰する

実 験 実 話 報 告 例

- (一) 高血圧で脳溢血の危険状態を好転恢復されている報告。
- (二) 心臓病特に危険な狭心症の危篤を好転恢復している報告。
- (三) 癌腫の進行を阻止し癌細胞を溶解淘汰して食道癌、胃癌、舌癌を恢復している報告。
- (四) 肺結核の治療中に耐性悪化した薬毒の副作用を好転して恢復されている報告。
- (五) 肝臓を腫らし胆嚢を痛めた危篤の入院患者が好転恢復した報告
- (六) 胃潰瘍で食事出来ず手術を要する危篤患者が好転恢復した報告。
- (七) 腎臓、糖尿病で入院すれど全治せぬ状態から好転全快の報告。
- (八) 関節リュウマチ並に神経痛で入院しても全治不能の難症が好転して楽に歩行できる報告。
- (九) 喘息で注射するほど発作してくる病原と副作用の被害を解毒好転して100%全治した報告。

中村菌化学研究所

京都市東山区翰町五条南
電話祇園(6)2364・0522番

Nakamura Fungus Chemical Lab.
Sayamachi Gojo, Higashiyama-ku,
Kyoto, Japan

御たを御
をつを
告な名を
広に誌入
本覧難記

近刊予告

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書 七十円

若き人ひとにおくる佛教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

法然上人鑽仰会編

浄土日常勤行式解説

新書 三十円

檀信徒の方々への信仰の手引書として御利用下さい

東京都品川区上大崎一ノ七八二

法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

日本一の生産・設備

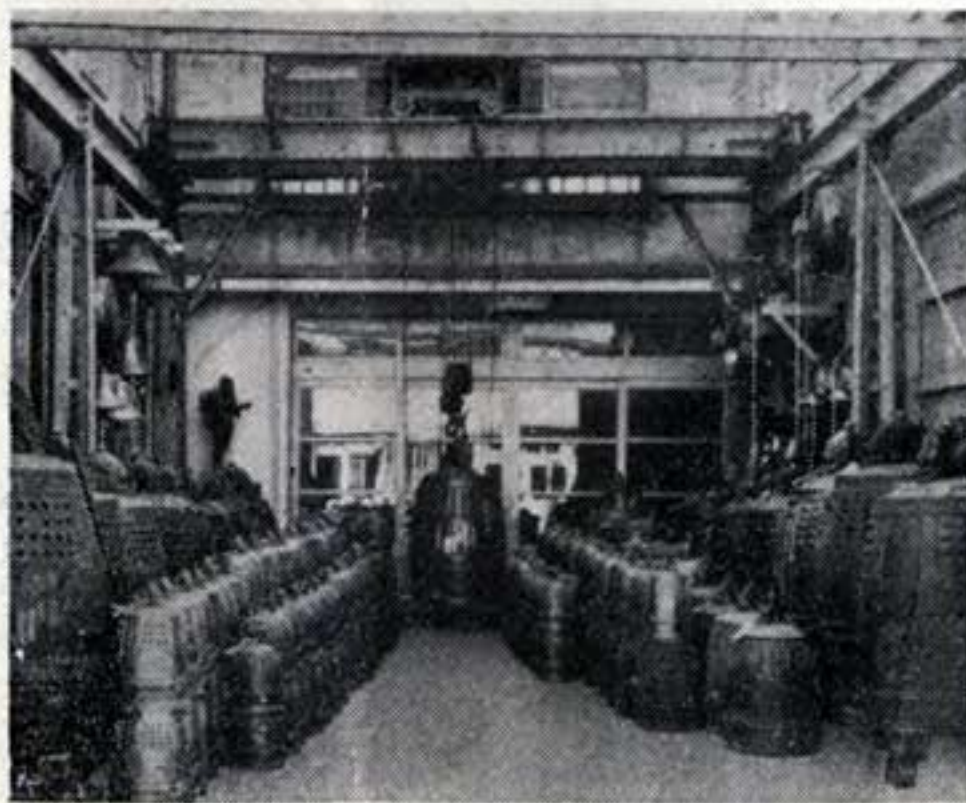
梵鐘 (54cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (21cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事 香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)
鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分 (梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 (34) 8847番 本社工場 高岡市横田